

呼吸器内科

主 な 体 制

医師体制

副院長（科長・部長）： 吉見 誠至

診療技術部長（部長）： 原田 孝



吉 見 誠 至

日本学会等認定資格

日本内科学会 総合内科専門医	2	吉見 誠至・原田 孝
日本呼吸器学会 呼吸器専門医・指導医	2	吉見 誠至・原田 孝
日本アレルギー学会 アレルギー専門医	1	吉見 誠至

活 動 報 告

■ 2024 年度のまとめ

気管支喘息、COPD、間質性肺炎、肺癌、呼吸器感染症、睡眠時無呼吸症候群など様々な呼吸器疾患の外来・入院診療を行った。

入院患者数、疾患の内訳は例年とほぼ同様の傾向であった。当科で一定数の COVID-19 の入院管理を担当した。高齢者が増えている影響で、理学療法士、言語聴覚士、ソーシャルワーカーなどコメディカルの関わりの重要性が増していると感じる。

当科での肺癌化学療法において、多職種を交えたカンサーボードを月 1 回行った。

内科系の外来で撮影された胸部レントゲンのダブルチェックは今まで通り行った。

【2024 年度実績】

HOT 新規導入	49 件
CPAP 新規導入	24 件
在宅 NPPV 新規導入	1 件
禁煙外来	22 人（成功率 50%）
気管支内視鏡	21 件

入院総数 445 人（昨年度比 + 3.6%）

内訳（DPC 病名上位 10 疾患）：

細菌性肺炎	132 人
肺がん（疑い含む）	80 人
間質性肺炎	51 人
COVID-19	34 人
COPD	26 人
睡眠時無呼吸症候群	20 人
誤嚥性肺炎	19 人
気管支喘息	13 人
膿胸	10 人
胸壁腫瘍	10 人

■ 2024 年度の目標・課題

- 当科での入院・外来化学療法において、カンサーボードを充実させていく。
- 超音波気管支内視鏡を導入する。
- 高齢者が増えており、引き続き訪問看護など社会的な医療資源との連携を積極的にはかっていく。

内分泌内科

主な体制

医師体制

科長（部長）： 荒木 修



荒木 修

日本学会等認定資格			
日本臨床検査医学会 臨床検査専門医・評議員	1	荒木 修	
日本内科学会 認定内科医	1	荒木 修	
日本糖尿病学会 糖尿病専門医・研修指導医	1	荒木 修	
日本糖尿病協会 療養指導医	1	荒木 修	
日本内分泌学会 評議員	1	荒木 修	
日本甲状腺学会 評議員	1	荒木 修	
臨床研修指導医	1	荒木 修	
緩和ケア研修修了	1	荒木 修	
難病指定医	1	荒木 修	
小児慢性特定疾病指定医	1	荒木 修	

活動報告

■ 2024 年度のまとめ

【診療内容】

外来

糖尿病内分泌外来 9 単位、甲状腺専門外来 1 単位、糖尿病初診外来 4 単位、フットケア外来 1 単位、糖尿病性腎症透析予防指導・糖尿病療養指導（随時）

検査

糖尿病・内分泌疾患に対する各種負荷試験

入院

糖尿病教育入院、血糖コントロール入院、内分泌精査入院（原発性アルドステロン症、下垂体疾患、副腎疾患など）、周術期・感染症・ステロイド治療・糖代謝異常妊婦周産期などにおける血糖管理（各科からのコンサルテーション）対応

【糖尿病チーム活動等】

- ・糖尿病療養チーム（Team Diabetes、2007 年発足）
日本糖尿病療養指導士 16 人、群馬県糖尿病療養指導士 4 人
糖尿病教室の運営や企画、職員啓発、学会発表など
糖尿病チームミーティング月 1 回
透析予防指導カンファレンス隔月 1 回
- ・外来糖尿病教室（通常年間 4 回。今年度は 1 回のみ、コロナ禍後初の開催。）
- ・しののめ会（利根中央病院糖尿病友の会昭和 63 年創立）
総会・学習会（今年度は開催を見合わせ、紙上での年次報・告）
- ・群馬県糖尿病セミナー・糖尿病ウォークラリー（患者・スタッフで参加）

糖尿病診療においては、最新の AID (Automated Insulin Delivery) 療法を含めたインスリンポンプ療法や持続血糖測定器を使用した糖尿病治療、透析予防指導やフットケア外来の実施など、あらゆる治療困難な症例や重症合併症例の治療と重症化予防に対応する体制を維持した。例年同様、入院患者向けに 1 週間の糖尿病教室を月 2 回のペースで開催した。院外からの紹介や健診後の初診患者対応を総合診療科と連携し診療した。

甲状腺疾患、原発性アルドステロン症、下垂体機能不全、ACTH 単独欠損症、副腎不全、クッシング症候群などの内分泌疾患ならびに、内分泌代謝緊急疾患である急性副腎不全、粘液水腫性昏睡、糖尿病性ケトアシドーシス、高血糖高浸透圧症候群などの診断治療にあたった。

多数の糖尿病患者を診療するため、非常勤医による外来や初診外来枠を複数設け対応した。常勤医 1 名の体制のため緊急疾患や入院中の糖尿病合併周術期・周産期患者の血糖管理などに十分対応しきれない局面も多くあり、総合診療科・内科各専門科をはじめ各診療科に併診いただき診療を行なった。初期研修医、総合診療科及び内科専攻医各位に糖尿病内科での研修をしていただいた。

■ 2025 年度の課題

内分泌・糖尿病領域において引き続き常勤医 1 人の体制であり、群馬大学からの外来支援を受け診療を行っている。患者数の増加に対する病診連携（紹介・逆紹介）の強化や、院内各科との診療連携（周術期・周産期・感染症・ステロイド治療時など）、内分泌・糖尿病領域の専門性の高い患者の入院受け入れ体制、糖尿病診療チームのスキルアップ等の課題に継続して取り組みたい。院内各診療科、栄養課、リハビリ科、薬剤部、診療支援部など各部署と連携し、入院治療から退院後の生活の場での安定した療養まで継続して行えるよう、引き続き質の高い糖尿病・内分泌診療を提供したい。このためにも初期ならび後期研修医の糖尿病内科研修を充実させ、スキルアップを図れるよう努めたい。コロナ禍で開催を見合わせていた外来糖尿病教室や患者会活動を再開しており、多数の患者・スタッフの参加を募りたい。糖尿病性腎症による新規透析導入患者数を減らすべく、腎症透析予防指導に力を入れたい。

消化器内科

主 な 体 制

医師体制

科長（部長）： 山田 俊哉
 部長： 深井 泰守
 医長： 井上錬太郎
 医員： AUNG PAING MOE



山 田 俊 哉

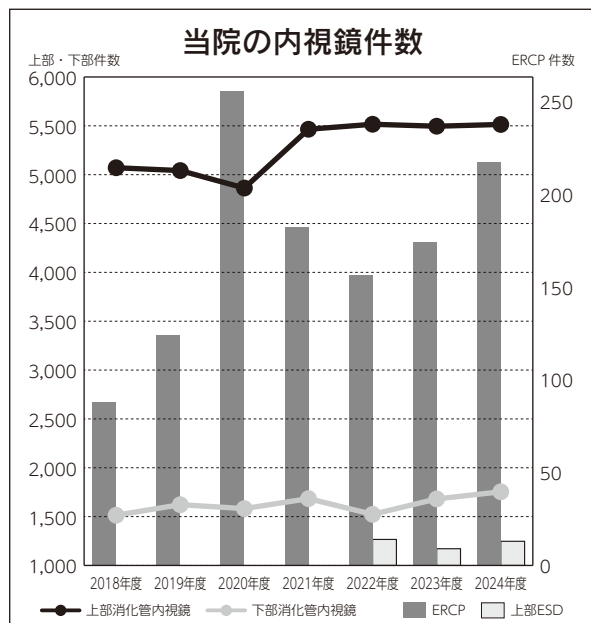
日本学会等認定資格

日本消化器病学会 消化器病専門医	山田 俊哉・深井 泰守
日本消化器病学会 消化器病指導医	山田 俊哉
日本消化器内視鏡学会 消化器内視鏡専門医	山田 俊哉・深井 泰守
日本消化器内視鏡学会 消化器内視鏡指導医	山田 俊哉
日本内科学会 総合内科専門医	山田 俊哉
日本内科学会 認定内科医	深井 泰守

活 動 報 告

■ 2024 年度のまとめ

消化器内科常勤医が2人増員となり、4人体制となった。上部・下部消化器内視鏡検査については、例年以上の内視鏡室の稼働を行い、totalの件数は上部消化管内視鏡検査5514件、下部消化管内視鏡検査1754件であった。ERCPが必要な胆膵疾患



も数多く当院に集まる状態で、ERCP217件と数多く行っている。また、早期胃癌などに対するESD(内視鏡的粘膜下層剥離術)も13件行った。深井先生がIBDの専門であり、IBDの診療も中心的に行っており、生物学的製剤使用など高度医療も行っている。また、2024年度より、超音波内視鏡検査が導入され、今までは膵臓癌、消化管粘膜下腫瘍などの組織診断をするためのEUSFNA(超音波内視鏡下穿刺吸引術)は渋谷・前橋方面へ紹介となっていたが、当院で行えるようになっており、当地域での胆道・膵臓癌の早期発見などにも取り組み始めている。

■ 2025 年度の課題

2025年度は今のところ下半期の消化器内科常勤が1名減員となる見込みだが、病棟・外来・内視鏡などは、総合診療科・他内科系Dr・外科Drと力を合わせて、可能な限り現在の医療の質を落とさないように取り組んで行ければと思う。また、また、当院は日本消化器内視鏡学会指導施設と日本消化器病学会認定施設であり、今後、若手Drへの指導にも力を入れていきたい。

循環器内科

主 な 体 制

医師体制

科長（部長）： 近藤 誠
 医長： 山口 実穂
 医員： 野尻 翔
 医員： 菊島 旭（内科専門研修プログラム専攻医）



近 藤 誠

日本学会等認定資格		
日本内科学会 総合内科専門医		近藤 誠
日本内科学会 総合内科専門医		近藤 誠
日本専門医機構認定 内科専門医		山口 実穂・野尻 翔
日本循環器学会 循環器専門医		近藤 誠・山口 実穂
日本循環器学会 指導医		近藤 誠
日本心血管インターベンション治療学会 心血管カテーテル治療専門医		近藤 誠
臨床研修指導医		近藤 誠
HEPT 受講済		近藤 誠・山口 実穂

活 動 報 告

■ 2024 年度 診療概況

2019 年 4 月より内科専門研修プログラム専攻医を受け入れ、2023 年末をもって 3 人目の専攻医がプログラムを終了した。2024 年度に続き、新たに 1 人の専攻医が加わり、現在鋭意研修中である。当院循環器内科では、スタッフの充実、実力強化に努め、今後の利根沼田地域での循環器診療の拡充を目指している。

人員強化に伴い、心肺運動負荷試験や心臓カテーテル検査のキャパシティが増え、必要に応じた専門的な検査、治療を積極的に進めている。

具体的な診療内容としては、虚血性心疾患（狭心症、心筋梗塞）、心不全、弁膜症、不整脈、閉塞性動脈硬化症などの循環器疾患の診断と治療を、できるだけ地域内で完結することを目指し診療を行っている。特に心疾患の予後と QOL 改善を目的とし、院内に多職種で構成する心臓リハビリテーション（心リハ）チームを結成し、入院中から外来に連続した心リハに取り組んでいる。また「心不全パンデ

ミック」と言われるほど、心不全患者が増加している現状に対し、早期発見、早期介入を目指す、「心不全ダイレクト検査」を立ち上げ、地域の開業医や診療所、院内他科との連携を強化し、心不全診療に取り組んでいる。その他、がん治療の進歩に伴い問題になることが増えてきた、「がん治療関連心機能障害」と言われる、抗がん剤や、免疫チェックポイント阻害薬の使用に関連する心機能障害を早期に発見するため、院内の各診療科と連携する取り組みを始めた。また高齢心不全患者が増えるに従い問題となることの増えた「心不全終末期」に対する対応として、アドバンスケアプランニングの実施や心不全緩和ケアについての取り組みを行っている。2025 年 4 月からは、循環器診療のさらなる充実を目指し、「循環器センター」を設立する。

<診療実績>

2024 / 4 / 1 ~ 2025 / 3 / 31	
CAG (Coronary Angiography)	65 件
PCI (Percutaneous Coronary Intervention)	54 件
AMI	15 件
UAP	8 件
下肢 PTA (Percutaneous Angioplasty)	5 件
ペースメーカー植え込み術	9 件
ペースメーカー交換術	6 件
植え込み型心電計	6 件
冠動脈 CT	20 件
CPX (心肺運動負荷試験)	216 件
負荷エコー検査 (運動)	16 件
心臓リハビリテーション	入院 180 件
	外来 152 件

<体制の整備>

- 日本循環器学会研修関連施設認定
循環器専門医育成のため、施設認定を受けた。
- 血管撮影装置更新
血管撮影装置は C アームが多方向に動く機構を備え、全身の血管をスピーディーかつ安全に検査治療することが可能となった。
- 冠血流予備量比 (FFR: fractional flow reserve)、Resting Full-Cycle Ratio (RFR) に加え、冠血流予備能 (CFR: Coronary Flow Reserve)、微小循環抵抗指数 (IMR: Index of Microcirculatory Resistance) が測定できる装置導入
適正な PCI を行うため冠動脈狭窄病変前後の冠動脈内圧を測定し心筋虚血の有無を評価する。薬剤負荷が必要な FFR と、薬剤負荷が必要でない RFR を併用することで、より容易に心筋虚血の評価をすることが可能となった。また、CFR、IMR を測定することで冠動脈に有意狭窄がない場合にも、微小循環障害の有無を評価することが可能となった。
- 60MHz 血管内超音波検査装置導入
60MHz の血管内超音波検査を導入したことにより、血管内の血栓やプラークをより詳細に観察することが可能となった。
- 冠動脈 CT
80 列 CT を用いて外来検査として冠動脈 CT を実施している。冠動脈 CT では、非侵襲的に冠動脈狭窄を評価でき、同時に血管壁の石灰化や動脈硬化プラークを観察することが可能である。
- CPX (心肺運動負荷試験)
心肺運動負荷試験を実施することで、慢性心不全や虚血性心疾患の患者が安全に活動可能な運動強度の閾値を判定することができ、日常生活における活動、行動制限を決定することができる。また、心臓

リハビリテーションや自宅での運動療法を行う際の適切な運動強度を決定することができる。

• 心臓リハビリテーション

医師、看護師 (病棟、外来)、臨床検査技師、理学療法士、作業療法士、薬剤師、管理栄養士、ソーシャルワーカー、医療事務の多職種で心臓リハビリテーションチームを構成し、慢性心不全、虚血性心疾患、閉塞性動脈硬化症、心臓大血管術後の患者に対して、心臓リハビリテーションを実施している。心臓リハビリテーションを行うことで、心疾患患者の QOL 改善とともに、予後の改善が期待できる。

• 病棟エルゴメーター導入

心臓リハビリテーションを行う中で、患者の自主訓練を習慣づけるため、病棟での空き時間に理学療法士に処方された運動処方を実践するためのエルゴメーターを病棟内に設置した。

• 心不全早期発見プロジェクト 「心不全ダイレクト検査」

心不全症状が出現する前の、心不全ステージ A/B の患者を早期に発見し、適切な早期介入を開始することで、利根沼田地域の心疾患患者の予後改善を目指している。「心不全ダイレクト検査」という指定の用紙を当院地域連携室に FAX することで容易に紹介可能となる仕組みを導入した。

• 心臓超音波検査装置導入

心不全や弁膜症の病態、病状を評価するための安静時検査や運動負荷検査、またがん治療関連心機能障害を診断するための GLS 測定などを行うため、循環器専用の心臓超音波検査装置を導入した。

• 運動負荷心臓超音波検査用臥位エルゴメーター導入

運動負荷を行いながら心臓超音波検査を行うため、寝たまま漕ぐことのできるエルゴメーターを導入した。

• がん治療関連心筋障害早期発見対策

がん治療を行う院内各診療科と連携して、スムーズに患者さんの紹介、検査、診察ができるような体制の整備を行った。また CORE (Cardio-Oncology Rehabilitation) という、がん患者、サバイバーのための、心臓リハビリテーションを考慮した運動療法を導入した。

• 心不全緩和ケア

病棟看護師を中心に心不全緩和ケアチームを発足させ、アドバンスケアプランニングの実施、多職種での意思決定支援の取り組みを通じて、心不全の終末期に対する介入を検討している。またチームで症例の振り返りや学習会などを行っている。

腎臓内科

主 な 体 制

医師体制

科長（部長）： 岡部 智史

医長： 大塚 瑛公



岡 部 智 史

日本学会等認定資格		
日本内科学会 認定内科医	1	岡部 智史
日本内科学会 認定内科専門医	1	大塚 瑛公
日本腎臓学会 腎臓専門医	2	岡部 智史・大塚 瑛公
日本腎臓学会 腎臓指導医	1	岡部 智史
日本透析医学会 透析専門医	2	岡部 智史・大塚 瑛公
日本透析医学会 透析指導医	1	岡部 智史
臨床研修指導医	1	岡部 智史

活 動 報 告

■ 2024 年度のまとめ

腎臓内科は、2016 年度より常勤一人体制であったが、2022 年 4 月からは大塚医師が着任し、常勤二人体制となった。入院・外来では、急性腎障害・糖尿病性腎症をはじめとするネフローゼ症候群・維持透析導入・透析合併症など、様々な疾患の診療を行った。2019 年 12 月からは新たに月水金午後クールを創設し、月水金 3 クール・火木土 1 クールの計 4 クールに維持透析枠を拡大し、2020 年度には定期外来維持透析患者数を 10 人増加させることができた。また、エンドトキシン吸着療法や緊急透析などの、緊急の血液浄化療法もこれまでと同様に施行できた。そのほか、シャント閉塞ゼロを目標に、シャント PTA を精力的に行い、年間 60 件程度を施行した。

■ 2025 年度の課題

2025 年度については、これまでと同様に、維持透析を中心として、現行の診療体制を維持していきたいと思う。

総合診療科

主 な 体 制

医師体制

常勤スタッフ： 部長/救急・外来部門科長（HCU病棟・外来医長） 鈴木 諭
 部長（高崎中央病院出向中） 比嘉 研
 医長/病棟診療部門科長（医学生・医学教育） 宇敷 萌
 医長（前橋協立病院出向中） 中村 大輔
 医員（緩和ケア・外来教育） 書上 奏
 医員（在宅医療プロジェクト・医学教育） 渡邊 健太
 医員（北毛病院出向中） 周佐 峻佑
 医員（在宅・家庭医療） 高橋 朋宏
 医員（健診） 松原 侑紀
 フェロー（埼玉医大総合医療センターより出向） 片山 理智
 診療看護師 安部 優子
 大塚 隆幸



鈴木 諭

非常勤スタッフ：名誉院長/利根中央診療所所長

日本専門医機構総合診療専門研修プログラム：

専攻医 PGY 5 植野 貴也
 専攻医 PGY 4 捧 博人
 専攻医 PGY 7 森 瑞樹（救急科専門医取得後ダブルボード）
 専攻医 PGY 3 佐藤 聖佳

外部総合診療専門研修プログラム：

専攻医 PGY 8 中村 元保（川崎協同総合診療専門研修プログラム）
 専攻医 PGY 7 大野 智子（前橋協立総合診療専門研修プログラム）

日本学会等認定資格	
日本プライマリ・ケア連合学会認定家庭医療専門医	鈴木 諭、比嘉 研、宇敷 萌、中村 大輔、渡邊 健太、書上 奏、高橋 朋宏
日本プライマリ・ケア連合学会認定指導医	鈴木 諭、比嘉 研、宇敷 萌、中村 大輔、渡邊 健太、書上 奏、高橋 朋宏
日本専門医機構総合診療専門医	比嘉 研、渡邊 健太、書上 奏、周佐 峻佑、高橋 朋宏、保田 和奏
総合診療専門研修プログラム指導医	大塚 隆幸、鈴木 諭、比嘉 研、宇敷 萌、中村 大輔
日本内科学会認定総合内科専門医	鈴木 諭
日本病院総合診療医学会認定病院総合診療医	鈴木 諭、中村 大輔
日本病院総合診療医学会認定指導医	鈴木 諭
臨床研修指導医	大塚 隆幸、鈴木 諭、比嘉 研、宇敷 萌、中村 大輔
日本救急医学会救急科専門医	中村 元保、森 瑞樹
日本小児科学会小児科専門医	大塚 隆幸
日本小児神経学会小児神経専門医	大塚 隆幸
日本アレルギー学会専門医	大塚 隆幸
緩和ケアの基本教育に関する指導者研修会修了	鈴木 諭、書上 奏
日本医師会認定産業医	大塚 隆幸、比嘉 研
ICD 制度協議会認定 ICD	鈴木 諭
日本 DMAT 隊員	鈴木 諭（統括）、森 瑞樹、高橋 朋宏
医学博士	鈴木 諭

2024 年度総合診療科実績

【概要】

総合診療科は開設して 11 年目を迎えましたが、この間、利根沼田地域の今後の医療のあり方を考えながら、利根中央病院及び利根中央診療所を支える 1 部門として、そのあり方を進化させてきました。直近数年間は、病棟診療チーム制導入、利根中央診療所訪問診療単位拡充、診療看護師と共同した病棟診療チーム体制整備等、日常業務の改善を中心に取り組んできました。現在、当科が担当している日常業務は、内科系救急外来・初診外来（発熱外来含む）・予約外来・病棟管理・訪問診療と多岐に亘っています。そして、日常業務の中で患者診療と併せて大切な業務の一つが教育です。初期臨床研修プログラムや総合診療 / 総合内科専門研修プログラムにおいて、当総合診療科は研修医 / 専攻医の教育部門として重要な役割を担っています。

2024 年度は改めて、教育を総合診療科として考え直す年度となりました。指導医として書上奏医師が復職されるとともに、フェローとしては、高橋朋宏医師が専攻医期間を明けて着任し、片山理智医師が埼玉医科大学総合医療センターから上半期に当科出向所属となり、研修教育体制の重層化がなされました。専攻医として森瑞樹医師、佐藤聖佳医師が合流し、新たな教育の機会が作られました。

また、専攻医や研修医を初めとした全てのメンバーが安心して働き、学び成長できる環境づくりを目指し、環境整備を行いました。具体的には、個々の症例に合わせた日々のカンファレンスを充実させることで、医学的な知識を習得する機会とすることはもちろんですが、社会的な課題をチームとして解決する重要性を学ぶ機会を大切に、後進教育の機会としました。また、研修医や専攻医の振り返りを丁寧に実施しました。

診療においては、病棟診療の体制は、3 チーム制に変更し診療看護師には指導医の診療補助的立場で病棟診療を中心に関わりを続けました。それぞれ主治医として責任持った病棟診療を行いながらも、チームとしても診療を行っていくスタイルを引き続き取りました。病院総合診療医・家庭医として、自らの知識や技術の研鑽は行いながらも、他科との連携を図り、より患者目線の診療を行うとともにコンサルトしやすい関係性の構築を目指した 1 年でした。

た。2022 年度から取り組みを始めた利根中央診療所における在宅医療プロジェクトについては、引き続き渡邊健太先生に担当頂くとともに、総合診療科医師複数名が訪問診療を担当する形に変更しました。

以上のように 2024 年度は改めて教育を大切な柱の一つと捉えて体制整備を中心的に行なった年度となりました。

【診療体制】

体制面では総合診療科診療科長を 2 名体制とし、救急・外来部門科長を鈴木諭医師が、病棟診療部門科長を宇敷萌医師が担当し、より機能的に診療や教育のマネージメントが行えるように変更を行いました。指導医として書上奏医師が育児休暇から復職されるとともに、フェローとしては、高橋朋宏医師が専攻医期間を明けて着任し、片山理智医師が埼玉医科大学総合医療センターから上半期に当科出向所属となり、研修教育体制の重層化がなされました。専門研修日本専門医機構の管理型総合診療専門研修プログラムには新たに当院初期研修プログラムを卒業した佐藤医師と救急科専門医取得後に総合診療専門医のダブルボード取得を目指す森医師を専攻医として受け入れ、総勢専攻医 4 名（PGY 5 が 1 名、PGY 4 が 1 名、PGY 3 が 2 名）となりました。また、上期には川崎協同病院総合診療専門研修プログラムから PGY 8 の中村医師を、下期には姉妹プログラムである群馬家庭医療学センター総合診療専門研修プログラム前橋協立コースから PGY 7 の大野医師を受け入れ、共に研修を行いました。年度を通じて院内に 9 名前後のスタッフ及び専攻医が常駐する体制を維持しました。

【外来部門】

総合診療科では主に予約外来と予約外・初診外来、発熱外来、二次検診・ワクチン外来（月曜日午前及び土曜日午前）を担当しています。COVID-19 pandemic 以後、発熱患者の受診動線を分離し発熱外来を設置しています。

予約外来

12,415 名 / 年 (105.4% 対 2023 年度)

二次検診・ワクチン外来

976 名 / 年 (76.6% 対 2023 年度)

予約外・初診外来

6,290 名 / 年 (109.9% 対 2023 年度)

予約外来は主にスタッフ医師 8 名で週 10 単位 (1 単位 = 午前ないし午後半日) を開設しています。高血圧、脂質異常症、糖尿病等の一般慢性疾患管理に始まり、多疾病罹患 (multimorbidity) の多科併診高齢者の外来通院科調整や、多剤内服調整も行いました。また、医学的問題だけではなく精神的社会的背景への対応なども行っています。専攻医による、入院担当患者退院後の follow up や外来患者短期経過観察目的の follow up 外来も引き続き開設しました。

予約外・初診外来の総受診者数は、地域内連携が強化されつつある中、紹介患者の増加もあり全体的に増加傾向となりました。また発熱外来受診者数は感染症流行状況により増減を認めました。地域の高齢化率の上昇を反映し個々の症例の重症度は高い傾向となっており、1 患者あたりの診療に要する時間が延長する傾向となっています。徒歩受診でも緊急性を有する疾患の方や重症者がいることから、外来混雑時や救急車重複要請時の対応を円滑にするために、発熱患者担当医師を含めて午前中は指導医及び専攻医の 3 名体制で外来対応をしています。発熱患者については、看護師による電話問診及びトリアージの後、PPE (Personal Protective Equipment) 装着の上、引き続き地域における発熱患者の 1 次～ 2.5 次診療を行いました。

更に 2024 年度も、2023 年度に引き続き専攻医や研修医、医学生に対する外来教育を積極的に行いました。2 次医療圏内で唯一の総合病院機能を有する病院で、かつ群馬大学医学部の関連病院として、多くの専門外来を有する病院であるため、希少疾患や難病患者の状態悪化への対応も求められており、より幅広い疾患に対する知識と状態悪化時の適切な対応ができる医師を育てることを目標としています。そして学問としての医学的知識だけではなく、自身が対応する患者一人一人の心理・社会的背景を理解し配慮した医療 (BPS モデル :Bio-Psycho-Social model) が提供できるように教育を続けました。

訪問診療に関しては、宇敷医師、渡邊医師、高橋医師の 3 名が 2024 年 4 月から利根中央診療所から行う体制に変更を行いました。2021 年度から引き続き、渡邊医師を中心に訪問診療プロジェクトを推進しております。

【救急部門】

2024 年度も 2023 年度に引き続き、平日日勤時間帯及び毎週土曜日午前において、救急搬送及び徒歩来院後院内トリアージで救急対応が必要と判断された内科系救急患者対応を、総合診療科医師中心にシフト制を取り診療を行いました。一部曜日の救急診療においては診療支援として専門各内科常勤医及び総合内科専門研修プログラムの専攻医にも対応を依頼しています。2024 年度の救急外来受診者の総数は、電話トリアージの推進や一次診療医療機関への受診案内等を勧めた効果もあり 2023 年度よりも減少傾向となりましたが、救急搬入件数及び救急応需率は 2023 年度に引き続き高率を維持しました。一方で救急要請件数の増加から、他の患者対応中や高度専門医療を必要とするとの判断から応需不能となった件数は、2023 年度同等で 115 件となりました。

救急外来受診者総数

6,369 名 / 年 (69.4% 対 2023 年度)

夜間休日患者数

3,256 名 / 年 (52.5% 対 2023 年度)

救急搬入件数

2,788 名 / 年 (98.7% 対 2023 年度)

内救急車 2,782 名 / 年

ヘリコプター 6 名 / 年

CPA 97 名 (ROSC 10 名、
ROSC 率 10.3%)

救急応需不能件数

115 件 (不応需率 4.0%)

2024 年度も発熱患者の救急搬送においては COVID-19 の可能性を考慮し、検査で COVID-19 が否定されない限りは全例 PPE 着用で発熱診療ブースでの対応を行いました。高齢化が進む利根沼田地域において高齢者救急の増加、CPA 症例の増加は顕著となっています。利根沼田医療圏は東京 23 区と同等の医療圏面積であり、救急車両による搬送時間が長くなる傾向があり、重症救急対応や

CPA の ROSC 率向上には病院前救急医療体制の整備と連携が必要です。2023 年度と比較し、高齢化を反映してか当院搬送症例の院内 ROSC 率は低下しましたが、今後も地域内外の EMS/HEMS との連携が重要であると考えています。この間も沼田医療圏内で発生した 3 次救急医療機関対応が必要と判断された症例に関しては、前橋赤十字病院を基地病院とした群馬ドクターヘリに多大なる協力を得ています。沼田医療圏においては J ターン（基地病院に戻らず近隣医療機関に患者搬送を行う）割合が増加傾向にあり、2024 年度は 6 件の群馬ドクターヘリ症例の直接搬入を受け入れると共に、搬送対象にならないまでも群馬ドクターヘリ要請されたヘリ連携症例も複数件応需対応を行いました。

【入院部門】

2024 年度も 2023 年度同様に専門的治療が必要な症例は臓器別専門科が主治医として受け持ち、多疾病罹患症例や疾病以外の社会的背景等が複雑かつ専門診療科対応困難な症例については当科が入院主治医として受け持つ形を基本的に取りました。より専門性の高い領域を臓器別専門科が主治医として入院対応するため、各臓器別専門科の周辺領域疾患に関しては該当科の状況に応じて当科が主治医として対応し、専門科からのアドバイスを受けながら入院診療を行いました。常勤医師が不在の疾患群に関しても外来各科専門医と連携した診療を行っており、結果として 2024 年度の当科担当入院患者の疾患内訳（ICD-10 準拠）は多岐に及んでいます。

入院患者については 2023 年度と体制を変化させ、宇敷医師、渡邊医師、高橋医師の 3 名を各チームの指導医とし、診療看護師が指導医の診療補助的立場で病棟診療中心に関わるチーム診療の骨格を作りました。そして各指導医以下に専攻医を 1～2 名、更に各専攻医以下に研修医、student doctor を配置する屋根瓦式病棟診療チーム体制を取り、病棟管理を行いました。診療看護師が各チームのメンバーの一人として診療に関わることで、入院患者を中心に早期医療対応が可能となると共に、外来・救急・入院患者診療と多重業務となる医師の業務軽減と医療安全にも寄与したと考えています。

総合診療科が担う業務は入院患者診療に留まらず、外来、救急、在宅診療に及ぶため、感染症流行

状況や重症入院患者の増加等の状況に合わせて受け持ち患者の制限を行いました。年度を通じた総担当患者数は 2023 年度と比較し、やや増加するとともに、地域の高齢化が進んできている事等の影響から疾患複雑化が進み重症患者を担当する割合が増加傾向となっています。

入院患者数 1,004 名/年(101.5% 対 2023 年度)

入院患者詳細：

カンピロバクター腸炎、偽膜性大腸炎、細菌性腸炎、B 群 /G 群連鎖球菌敗血症、MRSA 敗血症、レジオネラ肺炎、神経梅毒、ツツガムシ病、眼部带状疱疹、サイトメガロウイルス性単核球症、食道癌、胃体部癌、上行結腸癌、下行結腸癌、直腸癌、胆嚢癌、声門上癌、肺門部腺癌、乳癌、胆嚢癌、膵尾部癌、尿管癌、転移性肝癌、び慢性大細胞型 B 細胞性リンパ腫、濾胞性リンパ腫、脳腫瘍、小球性低色素性貧血、吸収不良症候群によるビタミン B12 欠乏性貧血、巨赤芽球性貧血、汎血球減少症、播種性血管内凝固、IgA 血管炎、血小板減少症、脾梗塞、縦隔リンパ節サルコイドーシス、甲状腺機能低下症、甲状腺クリーゼ、急性甲状腺炎、糖尿病性ケトアシドーシス、糖尿病性高血糖高浸透圧症候群、低血糖、副腎クリーゼ、肥満低換気症候群、脱水症、低ナトリウム血症、アルコール性ケトアシドーシス、高カリウム血症、低カリウム血症、水中毒、低アルブミン血症、急性アルコール中毒、不安神経症、心因性失神、細菌性髄膜炎、無菌性髄膜炎、筋萎縮性側索硬化症、パーキンソン病、薬剤性パーキンソン症候群、アカシジア、脊髄小脳変性症、てんかん複雑部分発作、症候性てんかん、睡眠時無呼吸症候群、ギラン・バレー症候群、ミトコンドリア脳筋症、低酸素脳症、メニエール病、良性発作性頭位めまい症、前庭神経炎、椎骨脳底動脈循環不全、高血圧切迫症、不安定狭心症、急性心筋梗塞、肺血栓塞栓症、感染性心内膜炎、蘇生に成功した心停止、心肺停止、発作性頻脈性心房細動、慢性うつ血性心不全急性増悪、視床出血、心原性脳塞栓症、アテローム血栓性脳梗塞、塞栓性小脳梗塞、高血圧性脳症、解離性大動脈瘤、胸部大動脈瘤破裂、感染性胸部大動脈瘤、深部静脈血栓症、食道静脈瘤、扁桃炎、インフルエンザ、肺炎球菌性肺炎、MRSA 肺炎、マイコプラズマ肺炎、気管支炎、扁桃周囲膿瘍、気管支喘息発作、肺気腫

感染増悪、特発性間質性肺炎急性増悪、肺化膿症、膿胸、自然気胸、縦隔気腫、口腔底蜂窩織炎、出血性逆流性食道炎、マロリ・ワイス症候群、出血性胃潰瘍、穿孔性虫垂炎、虚血性大腸炎、麻痺性イレウス、閉塞性イレウス、大腸憩室出血、便秘症、腹腔内膿瘍、アルコール性肝硬変、急性肝不全、肝膿瘍、胆石性急性胆嚢炎、総胆管結石性胆管炎、特発性急性膵炎、アルコール性慢性膵炎急性増悪、下肢蜂窩織炎、頸部リンパ節炎、薬剤過敏性症候群、乾癬性関節炎、多形滲出性紅斑、褥瘡、MRSA 膝関節炎、化膿性関節炎、RS3PE 症候群、成人発症スチル病、偽痛風、リウマチ性多発筋痛症、仙腸関節炎、化膿性脊椎炎、腰椎椎間板ヘルニア急性増悪、急性腰痛症、急性腎盂腎炎、微小変化型ネフローゼ症候群、慢性腎不全急性増悪、尿管結石、結石性腎盂腎炎、精巣上体炎、外陰部潰瘍、月経困難症、肺胞出血、COVID-19、顔面挫創、慢性硬膜下血腫、外傷性くも膜下出血、外傷性気胸、腰椎圧迫骨折、仙骨骨折、アセトアミノフェン中毒、ベンゾジアゼピン中毒、三環系抗うつ薬中毒、抗精神病薬中毒、一酸化炭素中毒、きのこ中毒、蜂アナフィラキシー、低体温、窒息、ピーナツアレルギー、アナフィラキシーショック

【教育】

病院総合診療や家庭医療学の面白さを学生や研修医へ実臨床を通じて伝えることは当科の一つの役割と考えています。2024 年度も引き続き研修医や専攻医の研修受け入れを行うとともに群馬大学医学部 5～6 年生の学外選択実習や病院見学の学生実習受け入れを積極的に行いました。また、診療時間内に学生、研修医向けのカンファレンスやレクチャーを行い、on/off the job のバランスを取っています。

学生実習受入：47 名

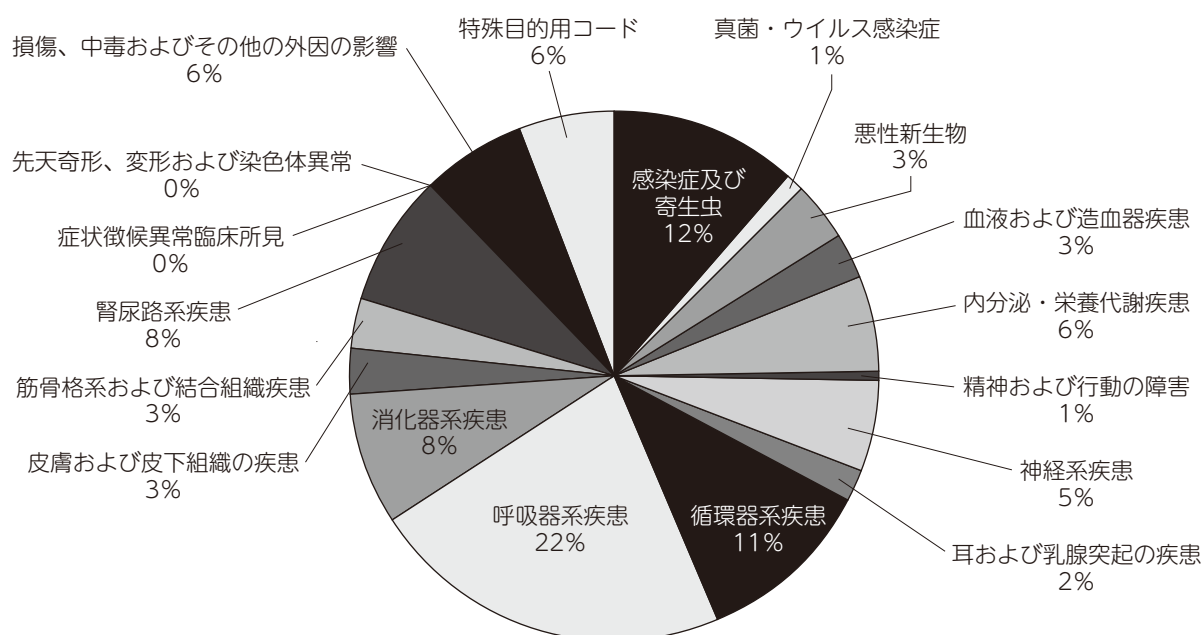
(内群馬大学学外選択実習 26 名)

初期研修受入：12 名

morning lecture

利根中央病院では研修医や専攻医、実習で来訪している医学生を主な対象とした morning lecture を定期的に行っています。当初は始業前時間を使っていた lecture を行っていましたが、昨今働き方改革が叫ばれるようになり時間内に開催時間を移動しての開催が増えてきています。専門各科の医師からのレクチャーもありますが、臨床研修を始めたばかりの研修医が日常で知っていた方が良く、臓器横断的な知識や社会資源等に関する知識を中心に、総合診療科スタッフ及び専攻医が依頼された内容に対してレクチャーを行っています。

入院患者数の疾患別比率



SDH/SDGs 教育

2021 年度から「SDH/SDGs を学び理解するためのカリキュラム」を策定し運用してきましたが、2024 年度からプラネタリーヘルスの概念を追加した新たな「総合診療科で SDH/SDGs とプラネタリーヘルスを学び理解するためのカリキュラム」へ変更しました。

本カリキュラムは、1. 生活環境や労働を背景とした疾患との関係性を理解すること、2. 地域特性に起因する医療システムの課題を理解し解決策を考えること、3. 住民が健康かつ豊かに生活できる持続可能な社会のあり方を考えること、の 3 点を主要な目的とし、最終的に患者の心理社会的背景を理解した診療を行うことの意義を学び日常診療において実践できることを目標としています。院内における理論学習を総合診療科スタッフが担当し、その後医療圏内の各地域に出向き 1 週間の宿泊型生活体験研修を行っています。

<理論学習テーマ一覧>

- ・「BPS (Bio-Psycho-Social) モデル」
渡邊 健太
- ・「SDH/SDGs」
宇敷 萌
- ・「プラネタリー・ヘルス」
鈴木 諭

<宿泊型生活体験研修先>

- ・川場村富士山集落、一般社団法人 WASAWASA 関連施設
- ・かたしな高原スキー場関連施設

外部講師招聘型教育

院内のスタッフだけではなく、外部講師を招聘した形で、主には医学生及び若手医師教育目的の総合診療 / 家庭医療領域に関するレクチャーや学習企画を、2024 年度も主催ないし共催しました。年 1 回の企画だけではなく、日常診療の疑問や診療方針の決定に寄与するような教育カンファレンスも開催しています。

<院内レクチャー>

- 1) 感染症カンファレンス
埼玉医科大学総合医療センター
三村 一行医師
- 2) 胸部画像カンファレンス

立川総合病院 氏田万寿夫医師

- 3) 心電図レクチャー
前橋赤十字病院 丹下 正一医師
- 4) 救急レクチャー
昭和医科大学 阿部 智一医師 計 12 回
- 5) 集中治療レクチャー
国保旭中央病院 坂本 壮医師 計 4 回

<学習企画>

- 1) 総合診療スキルアップセミナー
2024 年 7 月 6 日
「エコーの秘訣を学ぼう! 実践的なエコー体験」
島根大学医学部附属病院総合診療医センター長
白石 吉彦医師
市立角館総合病院総合診療科 / 秋田大学医学部
附属総合診療医センター 渡部 健医師
- 2) 闘魂外来 & 闘魂祭
2024 年 10 月 26 日 -27 日
群星沖縄臨床研修センター 徳田 安春医師
福知山市民病院 川島 篤志医師
市立大町総合病院 関口 健二医師
市立伊勢総合病院 谷崎隆太郎医師

初期研修医教育：担当 飯島 研史（北毛病院）、
比嘉 研、宇敷 萌

初期研修医の集合研修として北毛病院から飯島研史医師に来訪頂き、月に 1 回の「レジデント・デイ」（学習企画とふりかえり）を継続開催しました。業務保証を行い時間内にレジデント・デイを定期的に行うことで、初期研修医自身が各々の研修内容を自身の成長に落とし込めるような形をとっています。レジデント・デイの学習テーマは、研修医に学んでもらいたい内容を含めて決定し、指導医がファシリテートをする形で行っています。

<初期レジデント・デイ学習テーマ一覧>

- 第 1 回：2024 年 4 月「プレゼン」
- 第 2 回：2024 年 5 月「プレゼンテーション」
- 第 3 回：2024 年 6 月「プレゼンテーション」
- 第 4 回：2024 年 7 月「医師のキャリア形成」
- 第 5 回：2024 年 8 月「Modified Mini-CEX」
- 第 6 回：2024 年 9 月
「研修医でも大丈夫 - 後輩指導 -」
- 第 7 回：2024 年 10 月「意思決定とその支援」

第8回：2024年11月

「医療者のためのコミュニケーション」

第9回：2024年12月「検査の基準と精度の関係」

第10回：2025年1月「Modified Mini-CEX」

第11回：2025年2月

「Whole Person Care と医療者の
Well-Being（マインドフルネス、バー
ンアウトとストレスマネジメント）」

第12回：2025年3月「研修振り返り」

専攻医教育：

担当 群馬家庭医療学センター指導医一同

群馬家庭医療学センター（G-CHAN）の総合診療専門研修プログラムとして、2021年度に引き続き、初期研修医と同様に G-CHAN 所属の専攻医を対象とした月に1回の集合教育「G-CHAN レジデント・デイ」を継続して開催しました。2024年度は2023年度に引き続き G-CHAN 所属の専攻医数が増加していることもあり、レジデント・デイについては各々の「ふりかえり」を小グループに分かれて行う時間を優先的に確保しました。

< G-CHAN レジデント・デイ学習テーマ一覧 >

4月「オリエンテーション」

群馬家庭医療学センター 渡邊 健太

5月「患者中心の医療」

堀越内科クリニック 堀越 健

6月「予防医療と健康増進」

群馬家庭医療学センター 平 洋

7月「未分類な問題へのアプローチ」

群馬家庭医療学センター 宇敷 萌

8月「慢性疾患のケア」

群馬家庭医療学センター 周佐 峻佑

9月「統合されたケア」

群馬家庭医療学センター 渡邊 健太

10月「知っておきたい法律の話」

群馬家庭医療学センター 小林 聡史

11月「複雑困難事例のケア」

群馬家庭医療学センター 高橋 朋宏

12月「長期的な全人的関係に基づくケア」

群馬家庭医療学センター 保田 和奏

1月「メンタルヘルス」

サンピエール病院 石井 大輔

また、集合型学習企画として例年隣県の栃木県と合同で行っているポートフォリオ合宿を、LGBTQ+ を主テーマに群馬主管で行いました。

<学習企画>

1) 群馬家庭医療学センター・栃木医療センター合同ポートフォリオ合宿

2025年2月15日

「性別って2つしかないと思いますか？」

土庫鍼灸治療院

外松 慶土

利根中央病院総合診療科

比嘉 研

【その他活動等】

学会活動：

・日本プライマリ・ケア連合学会災害システム委員会副委員長 鈴木 諭

学会演題発表等（演者）：

・第9回 J-HPH スプリングセミナー（2024.4.20）
ワークショップ1

「LGBTQ フレンドリーな医療機関の実践

～アライとしての一歩を踏み出そう～」

ファシリテーター 比嘉 研

（全日本民主医療機関連合会 SOGIE コミュニティメンバー）

・第15回日本プライマリ・ケア連合学会学術大会
（2024.6.7-9）
シンポジウム17

「災害時のプライマリ・ケアが持続可能になるためのクリニカルパールズ」

パネリスト 鈴木 諭

企画展示 医療とアート

「利根中央病院 似顔絵セラピープロジェクト」

鈴木 諭、小野 優里

一般演題3 ダイバーシティ /SDH/ メンタルヘルス DP-22

「性的マイノリティ初学者が医師向け学習プログラムを受講した後に実施した講演活動の報告」

比嘉 研

一般演題 3 ダイバーシティ /SDH/ メンタルヘルス DP-24

「医療者が行うアートセラピー活動について～似顔絵は笑顔の処方箋～」

小野 優里、鈴木 諭

- ・第 27 回日本臨床救急医学会総会・学術集会 (2024.7.20)

一般演題：スポーツと救急医療 O-48

「群馬県における大規模市民マラソン救護体制に対する試み」

星野 唯、鈴木 諭、遠藤 匠真、
中村 樹菜、中村 光伸

- ・第 56 回日本医学教育学会大会 (2024.8.9-10)
ワークショップ 10

「教育現場における多様な SOGI に基づく困難への対応」

ファシリテーター 比嘉 研

- ・第 29 回日本病院総合診療医学会学術総会 (2024.9.7-8)

パネルディスカッション 2

「災害時における病院総合医の役割と挑戦：未来の災害医療への道」

座長 鈴木 諭

一般演題 2「循環器」 O-014

「造影 CT 検査が心筋梗塞の診断に寄与した一例」

植野 貴也、片山 理智、宇敷 萌、
野尻 翔、佐藤 聖佳、鈴木 諭

- ・日本プライマリ・ケア連合学会第 21 回秋季生涯学習セミナー (2024.9.14-15)

ワークショップ 18

「今さら聞けない LGBTQ+」

企画責任者 比嘉 研

- ・日本東洋医学会第 80 回関東甲信越支部学術総会 (2024.10.27)

「長年持続した耳鳴りが香蘇散で軽減した一例」

比嘉 研

- ・第 10 回群馬総合診療総合内科フォーラム (2024.11.20)

「II 型呼吸不全患者の治療方針を臨床倫理 4 分割法を用いて検討した一例」

捧 博人

- ・第 13 回日本プライマリ・ケア連合学会関東甲信越ブロック支部地方会 (2024.12.1)

シンポジウム②

「災害 過去からの歩み、未来に向けて」

「プライマリ・ケアを実践する立場として、災害時に求められる私たちの任務と役割」

シンポジスト 鈴木 諭

ポスター発表

「PPI が発症リスクになった Clostridioides difficile 感染症の一例」

捧 博人、宇敷 萌、渡邊 健太、
高橋 朋宏、鈴木 諭

ポスター発表

「思春期女子に向けたヘルスプロモーション活動の実施報告」

佐藤 聖佳

- ・第 30 回日本病院総合診療医学会学術総会 (2025.2.22-24)

パネルディスカッション 9

「私たちだからこそできる災害医療への関わり方：未来の災害医療への道 part 2」

演者 鈴木 諭

- ・第 30 回日本災害医学会総会・学術集会 (2025.3.6-8)

ポスター 21 その他 1

「災害医療体制の乏しい中山間地域での局地災害への対策・対応を考える」

鈴木 諭

- ・日本内科学会第 703 回関東地方会 (2025.3.8)

「発熱を契機に不完全型 Heefordt 症候群の診断に至った 1 例」

中村 元保、吉田絵理子、渡邊 健太、
捧 博人、鈴木 諭

論文・執筆等：

Harada T, Watari T, Watanuki S, Kushiro S, Miyagami T, Syusa S, Suzuki S, Hiyoshi T, Hasegawa S, Nabeshima S, Aihara H, Yamashita S, Tago M, Yoshimura F, Kunitomo K, Tsuji T, Hirose M, Tsuchida T, Shimizu T. Preventable diagnostic errors of lower gastrointestinal perforation: a secondary analysis of a large-scale multicenter retrospective study. Int J Emerg Med. 2024 Dec 20;17 (1) :192. doi: 10.1186/s12245-024-00781-4. PMID: 39702011; PMCID: PMC11660691.

講演・学校保健活動等：

《学校保健活動》

- ・沼田市立沼田西中学校 教員等対象
「心について」 宇敷 萌
- ・群馬県立渋川工業高校 定時制生徒対象
「性教育」 鈴木 諭
- ・みなかみ町立古馬牧小学校 小学 6 年生対象
「飲酒・喫煙・薬物乱用防止」 中村 元保
- ・沼田市立沼田西中学校 中学 3 年生対象
「性教育」 鈴木 諭
- ・沼田市立利根中学校 全校生徒対象
「飲酒・喫煙・薬物乱用防止」 渡邊 健太
- ・沼田市立利南東小学校 小学 5 ～ 6 年生対象
「飲酒・喫煙・薬物乱用防止」 鈴木 諭
- ・群馬県立沼田女子高等学校 高校 1 年生対象
「性教育」 鈴木 諭
- ・川場村立川場中学校 中学 3 年生対象
「がん教育」 鈴木 諭
- ・川場村立川場中学校 中学 3 年生対象
「性教育」 鈴木 諭
- ・片品村立片品中学校 中学 3 年生対象
「がん教育」 鈴木 諭
- ・沼田市立白沢中学校 中学 1 ～ 3 年生対象
「飲酒・喫煙・薬物乱用防止」 捧 博人
- ・沼田市立池田小学校 小学 5 ～ 6 年生対象
「命の大切さ」 鈴木 諭
- ・沼田市立川田小学校 小学 4 ～ 6 年生対象
「メディア教育」 比嘉 研
- ・沼田市立多那小中学校 小学 3 年～中学生対象
「メディア教育」 森 瑞樹

- ・沼田市立沼田西中学校 中学 2 年生対象
「心肺蘇生法講習」 森 瑞樹
- ・沼田市立沼田中学校 全校生徒対象 249 名
「メディア教育」 高橋 朋宏
- ・沼田市立沼田東中学校 中学 3 年生対象
「性教育」 鈴木 諭
- ・沼田市立沼田南中学校 中学 3 年生対象
「がん教育」 鈴木 諭
- ・沼田市立白沢小学校 小学 6 年生対象
「飲酒・喫煙・薬物乱用防止」 植野 貴也
- ・沼田市立多那中学校 中学生対象
「薬物乱用防止」 鈴木 諭
- ・群馬県立利根実業高等学校 高校 1 年生対象
「性教育」 鈴木 諭
- ・沼田市立薄根小学校 小学 1 ～ 3 年生対象
「医師への健康疑問を質問」 鈴木 諭
- ・沼田市立沼田南中学校 中学 3 年生対象
「性教育」 鈴木 諭
- ・高山村立高山小学校 小学 6 年生対象
「がん教育」 鈴木 諭
- ・群馬県立沼田女子高等学校 高校 1 年生対象
「心肺蘇生法講習」 鈴木 諭
- ・沼田市立利根中学校 全校生徒対象
「がん教育」 鈴木 諭
- ・沼田市立沼田南中学校 中学 2 年生対象
「心肺蘇生法講習」 森 瑞樹
- ・昭和村立大河原小学校 小学 6 年生対象
「飲酒・喫煙・薬物乱用防止」 鈴木 諭
- ・沼田市立薄根小学校 小学 4 ～ 6 年生対象
「医師への健康疑問を質問」 鈴木 諭
- ・みなかみ町立古馬牧小学校 小学 5 ～ 6 年生対象
「性教育」 鈴木 諭
- ・昭和村立南小学校 小学 5 ～ 6 年生対象
「性教育」 鈴木 諭
- ・沼田市立沼田東小学校 小学 6 年生対象
「飲酒・喫煙・薬物乱用防止」 鈴木 諭
- ・沼田市立沼田北小学校 小学 6 年生対象
「薬物乱用防止」 鈴木 諭
- ・沼田市立利根小学校 小学 5 ～ 6 年生対象
「飲酒・喫煙・薬物乱用防止」 岩出 良介

小児科

主 な 体 制

医師体制

科長（部長）： 西村 秀子

医員： 清水 祐基

医員： 土橋 里美



西 村 秀 子

日本学会等認定資格

日本専門医機構認定 小児科専門医	1	土橋 里美
臨床研修指導医	1	西村 秀子

活 動 報 告

■ 2024 年のまとめ

・外来診療 患者数は 平均 50.7 人 / 日。

一般外来：新型コロナウイルスの感染症は減少したが、胃腸炎、溶連菌感染症、RS ウイルス感染症、マイコプラズマ感染症など多くの感染症が流行した。流行に伴い、混雑する日もあった。特に年末年始にインフルエンザウイルス感染症が流行し、救急外来を含め、一般外来が大変混雑した。救急外来の患者数は前年の約 1.5 倍に増加し、病院として人員を増やして対応した。

腸重積症の整復を 3 人に施行。そのうちの 1 人は整復困難で群馬県立小児医療センターに搬送した。

専門外来：内分泌外来、神経外来、消化器外来、心外来、腎外来などの専門外来を開設。尿路感染症の入院患者数が増加したため、腎尿路奇形の評価のための検査である膀胱造影検査件数も多かった（5 人）。

負荷試験：2024 年度は食物負荷試験を 10 人に施行（卵 8 人、牛乳・乳製品 2 人）。内分泌負荷試験を 3 人に施行（LHRH 負荷、アルギニン負荷、TRH 負荷）。

・入院診療 一般小児科 161 人、新生児 59 人。

一般小児科：入院患者数は前年度にくらべ約 2 割減少した。肺炎・気管支炎・喘息様気管支炎（59 人）、喉頭炎（3 人）など呼吸器感染症が約 1/3 を占めていた。RS ウイルス感染症（20 人）が最多であったが、前年度に比べマイコプラズマ肺炎（13 人）の患者が多かった。入院患者数が増加した要因はマイコプラズマ感染症自体が増加したことに加え、耐性菌の割合が高かったためと思われる。気管支喘息発作（18 人）、川崎病（7 人）胃腸炎（11 人）は前年度とほぼ同数であった。尿路感染症（15 人）は前年度の約 5 倍に増加した。溶連菌感染症（14 人）の入院が前年度に引き続き多かった。溶連菌が起因菌となった疾患は扁桃炎、肺炎、蜂窩織炎、急性糸球体腎炎などで、emn 型分析を一部の患者に提出した。三次医療機関への転院搬送を行った患者は 6 人だった（肺炎、眼窩蜂窩織炎でドレナージ、気管支喘息発作、川崎病）。

新生児：新生児の入院数は前年度とほぼ同じであった。低出生体重児（17 人、<2000g は 1 人）呼吸障害（13 人）、低血糖（6 人）、黄疸（13 人）、初期嘔吐（4 人）によるものがほとんどであった。呼吸管理を要した患者は 3 人（全例が N-DPAP：呼

気吸気変換式経鼻持続要圧呼吸法)だった。三次医療機関への転院搬送2人だった(呼吸障害、中腸軸捻転で緊急手術)。吾妻地区での分娩取扱医療機関がないことが影響して、外国人妊婦より出生した児の入院数が増加した(計13人、ネパール6人、ベトナム5人、フィリピン1人、中国1人)。

■ 2025年の課題

・ワクチン

5種混合ワクチン(4種混合ワクチンにヒブワクチンが混合)、20価の肺炎球菌ワクチンが定期接種化された。ワクチンの進歩により細菌性髄膜炎や敗血症などの重症感染症が確実に減少している。また、水痘やロタウイルス胃腸炎などの患者数も減少している。その一方で接種すべきワクチンが増加し複雑になっている。保護者がワクチンを対し正しく理解し、接種がすすむよう体制を整えたい。

・成人移行支援

これまでも腎疾患、内分泌・代謝疾患、アレルギー疾患など小児期発症の慢性疾患は中学校卒業後に他科や他院に紹介してきた。小児科学会からの提言より「成人移行支援」は医療のみならず、健康・福祉という広い視野から提供されるものという考えに基づき、他職種などとの連携し、移行がスムーズに行えるようにしていきたい。

外科

主 な 体 制

医師体制

院 長	： 関原 正夫
科長（診療部長・部長）	： 郡 隆之
副科長（部長）	： 小林 克巳
部長	： 熊倉 裕二
医長	： 稲川万里江
医長	： 浦部 貴史
医長	： 岩崎 竜也



郡 隆 之

日本学会等認定資格

日本外科学会 外科認定医	1	小林 克巳
日本外科学会 外科専門医	4	関原 正夫・郡 隆之・小林 克巳・熊倉 裕二
日本外科学会 外科指導医	2	郡 隆之・小林 克巳
日本専門医機構認定 外科専門医	1	岩崎 竜也
日本がん治療認定医機構 がん治療認定医	3	関原 正夫・郡 隆之・小林 克巳
日本呼吸器外科学会 呼吸器外科専門医	1	郡 隆之
日本呼吸器内視鏡学会 気管支鏡専門医・指導医	1	郡 隆之
日本消化器外科学会 認定医	1	関原 正夫
日本消化器外科学会 専門医・指導医	2	小林 克巳
日本消化器外科学会 消化器外科専門医	1	熊倉 裕二
日本消化器外科学会 消化器がん外科治療認定医	2	小林 克巳・熊倉 裕二
日本消化器内視鏡学会 消化器内視鏡専門医	1	小林 克巳
日本食道学会 食道科認定医	1	熊倉 裕二
日本腹部救急医学会 認定医	1	小林 克巳
日本臨床栄養代謝学会 認定医	2	郡 隆之・小林 克巳
日本臨床栄養代謝学会 指導医	1	郡 隆之
肺がん CT 検診認定機構 認定医	1	郡 隆之
日本 DMAT 隊員	1	関原 正夫
日本 DMAT 総括 DMAT 登録者	1	関原 正夫
臨床研修指導医	4	郡 隆之・小林 克巳・熊倉 裕二・浦部 貴史

活 動 報 告

■ 2024 年度のまとめ

2024 年度はアフターコロナで通常の生活が戻り、通常の医療業務が主になった。しかし、県北部の救急医療は当院に集中する傾向に変化はなく、2 次医療圏内外からの救急疾患の受け入れ要請も増加し、若手の岩崎竜也医師を中心に昼夜を問わず救急対応した 1 年間であった。幸い、大学医局より 2024 年度に 1 名増員となったためほぼ受け入れ

が可能であった。

がん診療領域では、医局派遣で大腸外科専門の稲川万里江医師が着任し、大腸癌の治療体制が強化された。また、浦部貴史医師が 2 年間のがん研有明病院での呼吸器外科国内留学より戻り、呼吸器外科医師 2 名体制に強化された。

当科で現在対応している主な疾患は、悪性腫瘍（肺癌、乳腺、胃癌、大腸癌）の手術・抗がん剤治療・

緩和医療、急性疾患、外傷である。利根沼田地区の耳鼻科・皮膚科常勤医師不在に伴う入院患者の受け入れは引き続き行った。朝ドラで知名度が上がったNST活動は、小林克巳医師によるリーダーシップでGLIM基準の導入や栄養士の病棟回診導入など今年も質の改善を行った。

手術症例数

(2024.1.1～12.31)

疾患名	症例数	悪性
食道腫瘍	0	0
胃十二指腸潰瘍	2	0
胃腫瘍	15	13
胆石症・胆嚢炎	65	0
胆道腫瘍	0	0
肝	0	0
脾	0	0
大腸腫瘍	49	47
その他大・小腸疾患	35	0
イレウス	15	0
虫垂炎	39	0
痔核、痔瘻	2	0
ヘルニア	88	0
乳腺	18	15
甲状腺	0	0
肺・縦隔・胸腔	33	21
小児外科	0	0
その他	79	0
計	440	96

■ 2025 年度の課題

- ・全領域における医療の質の向上。早期回復早期退院の促進。外科救急医療体制の強化。
- ・小林克巳医師による院内のNST体制の強化。外科教育体制の整備。
- ・稲川万里江医師による下部消化管領域の拡充。
- ・浦部貴史医師による呼吸器外科領域の拡充。

脳神経外科

主 な 体 制

医師体制

副院長（科長・部長）： 河内 英行

部 長： 長岐 智仁



河 内 英 行

日本学会等認定資格			
日本脳神経外科学会 認定専門医	1	河内 英行・長岐 智仁	
日本静脈経腸栄養学会 認定医	1	河内 英行	
NST 医師	1	河内 英行	
日本 DMAT 隊員	1	河内 英行	
臨床研修指導医	1	河内 英行・長岐 智仁	

活 動 報 告

■ 2024 年度のまとめ

2023 年度より着任した長岐医師との常勤医体制も 2 年目となった。水曜日・土曜日外来には群馬大学脳神経外科の協力を得ており、脳卒中・脳腫瘍などの難治性疾患について、群馬大学との連携も充実している。

また、片頭痛予防外来では新規に 3 名の患者様に受診いただき、片頭痛の発症予防に好評を得ている。ボツリヌス治療では、顔面けいれんに対し、12 名の患者様にのべ 27 回の治療を行っている。

手術治療については、慢性硬膜下血腫穿孔洗浄術 24 例、シャント抜去術 1 例、広範囲の頭部挫創の閉創術 2 例の計 27 例施行した。

■ 2025 年度の目標・課題

脳卒中の予防については、例年通り啓蒙活動を行いつつ、働く女性に多い片頭痛対策にも力を注いでいきたい。また、認知症サポート医を取得し、認知症に対する治療の導入を検討している。

整形外科

主 な 体 制

医師体制

科 長（部長）： 須藤 執道
副科長（部長）： 細川 高史
医 長： 有澤 信亮
医 員： 川上 詩織
医 員： 新島 宏人



須 藤 執 道

日本学会等認定資格		
日本専門医機構認定整形外科専門医	2	須藤 執道・細川 高史
日本整形外科学会認定運動器リハビリテーション医	1	須藤 執道
日本手外科学会認定専門医	1	細川 高史

活 動 報 告

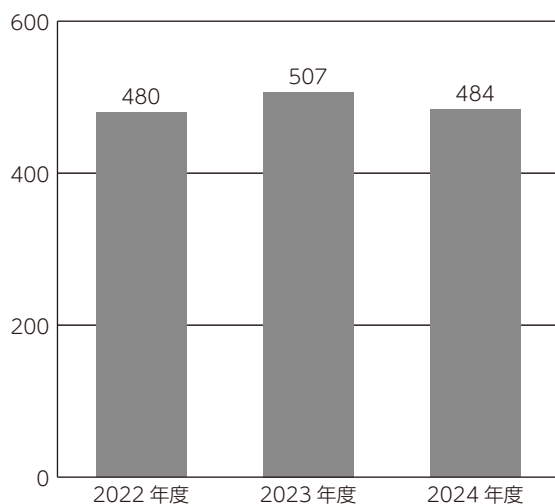
■ 2024 年度のまとめ

- ・2024 年度も骨折などの外傷を中心に幅広い対応を行った。
- ・2023 年度からは手関節の関節鏡を導入しており、鏡視下での手術も行っている。

■ 2025 年度の課題

- ・2025 年度も引き続き変形性関節症を代表とする変性疾患に対する治療と、高齢者の骨折の原因である骨粗鬆症に対する予防的治療を医師会の先生方と協調して行っていきたい。

手術件数

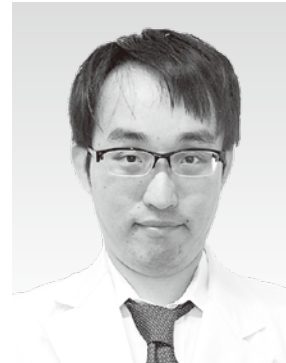


産婦人科

主 な 体 制

医師体制

名誉院長（部長）： 糸賀 俊一
 科 長（部長）： 鈴木 陽介
 部 長： 小松 央憲
 医 長： 西出 麻美
 医 長： 橋本 啓（9月まで）
 医 長： 浦部 夢子
 医 員： 宮川 恒介



鈴木 陽 介

日本学会等認定資格

日本産婦人科学会専門医	6	糸賀 俊一・鈴木 陽介・小松 央憲・西出 麻美・橋本 啓・浦部 夢子
日本産婦人科学会指導医	3	糸賀 俊一・鈴木 陽介・小松 央憲
臨床研修指導医	4	糸賀 俊一・鈴木 陽介・小松 央憲・西出 麻美

活 動 報 告

■ 2024 年度のまとめ

利根中央病院産婦人科は、群馬県北部の中核病院として、①産婦人科全般の診療、②分娩取り扱い、③婦人科救急受け入れ体制の維持を目標としている。診療圏が利根沼田・吾妻・渋川の3地域にまたがっており、各地域の診療所・病院と連携しながら診療を行っている。

2024 年度の分娩数は 307 件と、2023 年度の 331 件からさらに減少した。若年女性人口の減少の中で、県内外から里帰りを広く受け入れることで分娩数の確保を目指した。

4 月より赴任した浦部夢子医師を中心に、最終年になった HPV ワクチンのキャッチアップ接種の啓発活動や、RS ウイルス母子免疫ワクチンの導入を行った。また、日本産科婦人科内視鏡学会の認定研修施設となり、小松央憲医師の指導のもと、腹腔鏡・子宮鏡の症例を増やしている。がん診療に対しては、群馬大学産科婦人科や緩和ケアチーム、利根中央診療所の在宅診療と連携のもと、診断、治療、看取りまで幅広く対応した。

■ 2025 年度の課題

エネルギーコストの高騰や医療材料費やオムツ代の価格上昇を踏まえ、2025 年 4 月から分娩費用の改定を行った。さらなる分娩数の減少や、分娩の保険適用が予定されている中で、いかに分娩を継続していくかが課題である。

■ 診療実績（2024 年度）

分娩数 307 件（うち帝王切開 68 件）
 手術数 263 件（うち腹腔鏡手術 72 件、
子宮鏡手術 30 件）

麻酔科

主 な 体 制

医師体制

非常勤麻酔科医 : 三枝 里江 (他6人)

日本学会等認定資格		
日本麻酔科学会麻酔科標榜医	7	
日本麻酔科学会麻酔科専門医	7	

活 動 報 告

■ 2024 年度まとめ

- ・麻酔科では手術部・外来（術前診察・ペインクリニック）での診察を行っており、麻酔科管理症例は1,051件、麻酔法は全身麻酔が約7割で、その他は区域麻酔管理が主となっている。
- ・患者の高齢化・緊急搬送対応など、合併症を有する重症患者割合は増加傾向である。
- ・隔週1日〈木〉のペインクリニック外来では、帯状疱疹後神経痛・筋骨格系疼痛管理が主となっており、薬物療法や低侵襲ブロックで対応している。
- ・手術患者の高齢化に伴い合併症を有する患者が増え、周術期管理の必要・重要性がより増している。

■ 2025 年度の目標・課題

- ・非常勤麻酔科医師で周術期麻酔管理の安全確保を手術室スタッフと協力し、徹底したものとする。
- ・外科各科・co-medicalとの連携を深めて、周術期の安全かつ効率的運用を図る。
- ・手術室看護師との患者情報共有と確認を徹底する。
- ・患者サービスにより寄与するべく、個々スタッフの心身健やかに務めることに留意する。

眼科

主 な 体 制

医師体制

科長（部長）： 高橋 宙



高 橋 宙

日本学会等認定資格

日本眼科学会 眼科専門医	1	高橋 宙
難病指定医	1	高橋 宙

活 動 報 告

■ 2024 年度まとめ

手術件数を以下に示す。

水晶体再建術 393 眼

翼状片手術 4 眼

■ 2025 年度の目標・課題

前年度は近医眼科クリニックの閉院に伴い加齢黄斑変性に対する硝子体注射の件数が急増したが、大きな合併症や人為的ミスの発生は無かった。引き続き患者負担の軽減と安全性を確保しつつ効率化に努めていく。

回復期リハビリテーション科

主 な 体 制

医師体制

科長（部長）： 安藤 哲



安 藤 哲

日本学会等認定資格		
日本ドック学会 人間ドック健診認定医	1	安藤 哲
日本医師会 認定産業医	1	安藤 哲
臨床研修指導医	1	安藤 哲

活 動 報 告

■ 2024 年度のまとめ

回復期リハビリテーション病棟では、年間延べ患者数は 11,978 人。その内訳は、運動器リハビリ：63.6%、脳血管リハビリ：25.1%、廃用症候群リハビリ：11.3% であった。脳血管リハビリが 17.8% から 25.1% と増加した。年間平均稼働率は 99.4%、一日平均 32.8 人の対応で、重症患者割合は 46.96% とほぼ前年と同じであった。退院時の 16 点以上の改善率は 69.9% で、在宅復帰率は 78.5% であった。院外からの紹介患者比率は昨年より約 1% 増加し 5.2% となった。

コロナ感染によるクラスターが発生した。また、中国国籍、ネパール国籍の患者入院があり、言葉の壁がリハビリだけでなく退院後の方向性を決める上でいろいろ問題になることもあった。

リハビリカンファレンスでは新たに「リハビリカンファシート」を作成・活用し職員間の情報共有に努め、面談でも「リハビリ面談シート」を新作・活用し、ご本人・ご家族が理解しやすい面談を心掛けるようにした。

■ 2025 年度の目標・課題

- ・医療機能評価を受審し、多職種、他部門との連携をより強化して、安全で安定した回復期リハビリテーション病棟を作る。
- ・院外からの患者の受け入れを促進する。

放射線科

主 な 体 制

医師体制

科長（医長）： 山田 宏明



山 田 宏 明

日本学会等認定資格

日本医学放射線学会 放射線診断専門医	1	山田 宏明
日本医学放射線学会 放射線科研修指導者	1	山田 宏明
臨床研修指導医	1	山田 宏明

活 動 報 告

■ 2024 年度のまとめ

- 当院は救急医療に力を入れており、それに伴って CT・MRI といった画像検査が増加している。また癌術前や術後経過観察目的の検査も多く、造影剤を使用した検査が今まで以上に増加している。
- 放射線科技師の定員に変化ないものの、人員配置や撮影の効率化によって検査数増加に対応している。放射線科専属看護師の新規配属もあり、造影検査の迅速化と検査の安全性向上を図ることが出来た。
- 造影検査増加に伴いアレルギーも一定の頻度で生じているが、複数の部署で合同シミュレーションを行い、迅速に対応できるように訓練している。基本的に放射線科医師が初期対応を行い、治療適応を判断している。アレルギーリスクが高い患者については、可能な限り放射線科医師が検査に立ち会い迅速な対応が出来るようにしている。
- 前年度も CT・MRI を中心に地域の先生方より多くの検査ご紹介を頂いた。偶発的に癌など検査目的外の病変が発見されることがあり、読影レポートを通じて報告を行っている。
- 放射線科内にて独自のヒヤリハット報告を行い、毎月振り返りを行っている。撮影方法などについ

ての勉強会も定期的に行い、撮影技術の向上に努めている。

- 読影レポートの見逃しを防止するため、院内で対策を講じている。

■ 2024 年度診療実績

	件数	前年比
一般撮影	35,850	105%
C T 検査	11,437	109%
MRI 検査	3,293	104%
健診関連	8,170	98%
総検査数	55,788	106%

放射線科診断部門読影件数

	件数	前年比
C T 検査	9,689	112%
MRI 検査	2,595	105%

■ 2025 年度目標

新しい撮影技術や撮影機器が次々に発表されている。当院でも撮影および読影技術の研鑽に努め、より良い医療を提供出来る様努力していく。

救急患者増加のため、検査待機時間が長くなっている。検査の迅速化、効率化が出来るよう一層努力し、お待たせする時間を短縮していく。

病理診断科

主 な 体 制

医師体制

科長（部長）： 大野 順弘



大 野 順 弘

日本学会等認定資格		
日本病理学会認定病理専門医	1	大野 順弘
日本臨床細胞学会細胞診専門医	1	大野 順弘
臨床研修指導医	1	大野 順弘
死体解剖資格	1	大野 順弘
H.pylori 感染症認定医	1	大野 順弘

活 動 報 告

■ 2024 年度活動報告

【体制の整備】

日本病理学会登録施設

日本臨床細胞学会認定施設

【CPC】

8月5日、12月16日、3月12日に開催。

【診療実績】

組 織 検 査	2,704
迅 速 検 査	37
免 疫 染 色	1,468
細 胞 診	3,551
迅 速 細 胞 診	22
病 理 解 剖	6

■ 2024 年度のまとめ

【精度管理】

- ・日臨技臨床検査制度管理では細胞診検査は全問正解で評価 A、病理組織検査では 20 問中 1 問不正解となり、正解率 95%であった。

- ・群馬県臨床検査精度管理調査は、全問評価 A であった
- ・日本病理制度保証機構が主催する、免疫染色の評価ではすべて許容範囲であり、フォトサーベイに関する精度管理では、すべて適性の評価を得ることができた。

【業務改善】

- ・切り出し業務を検査技師にタスク・シフトし、病理医の業務軽減を行った。
- ・ゲノム医療に必要なコンパニオン診断のための外注検査の対応を行った。

■ 2025 年度の課題

- ・病理医の交代がスムーズにいくように体制を整える。
- ・研修医の CPC レポートの作成、プレゼンテーションの指導を行う。
- ・機器の更新、試薬の検討を行い病理業務の近代化を進めていく。

健診センター

主 な 体 制

医師体制

健診センター長	：	小沢 恵介
事務課長	：	中嶋 美保
保健師	：	4人
看護師	：	4人
准看護師	：	1人
事務員	：	7人



小 沢 恵 介

日本学会等認定資格

人間ドックアドバイザー	2	山田 美香・樋口 雄大
日本人間ドック・予防医療学会認定医	1	小沢 恵介
健診マンモグラフィ読影認定医師	1	小沢 恵介

活 動 報 告

■ 2024 年度のまとめ

人間ドック数：2,562 件、前年比 100.1%
事業所検診数：3,455 件、前年比 90.8%
協会健保健診：1,760 件、前年比 109.6%

上記のとおり、受け入れを行った。

新型コロナウイルス感染症や体調不良による、健診・ドックの予約の変更などを柔軟に対応できるよう変更用の枠を増やし先延ばしにならないよう対応することができた。また、診断書検診も枠を増やし可能な限り受け入れを増やすことができた。

医師体制は昨年度同様で常勤医師 1 名と週 3 回と隔週の金曜日の非常勤医師による協力で昨年より多くの件数を追求した。

各市町村からドック後の特定保健指導の依頼が増加し対応を始めた。脳ドック希望も増加傾向であり、脳外科医師とも連携し対応ができた。ストレスチェックは職員を対象にオクレンジャーにて配信回答を行った。

1 月より、オプションとして心臓検査' (BNP) の項目を新規に追加することができた。

■ 2025 年度の課題

常勤の医師体制は今後も医師獲得に向けて努力を行う。常勤保健師育休明けにより、特定保健指導への対応、各種資格取得への奨励・援助を行い、健診結果にもとづく指導対応が強化できる状況となる。各健診期間の駆け込み需要を緩和するため期間中の早めの受診を呼びかける。例年より、健診の申込が早く早々に午前の予約枠が埋まってしまっているため柔軟な予約対応をしていきたい。

ドック・健診の件数増および保健指導を充実させ、地域住民の健康づくり・住みやすいまちづくり・安心して働ける職場づくりに貢献する。

皮膚科

主 な 体 制

医師体制

医師（医長）： 永井 弥生（非常勤）

活 動 報 告

■ 2024 年度のまとめ

【全体の動向】

2024 年度は週 3～4 回の非常勤医師による診療体制であった。皮膚科の一般的な疾患に加え、重度褥瘡や感染症、熱傷、血管障害に伴う潰瘍等、他科と連携をとりながら対応した。

【皮膚科一般疾患】

皮膚科領域では近年、様々な疾患に対する新しい治療が進んでいる。難治性アトピー性皮膚炎に対する生物学的製剤、JAK 阻害薬などの治療薬を使用する方は増加しており、良好な結果を得ている。難治性の慢性蕁麻疹に対しての皮下注射薬による治療、原発性腋窩多汗症に加え、原発性手掌多汗症に対する外用薬治療も行えるようになった。高齢者に多い爪白癬は、可能な方は抗真菌薬の内服治療、高齢であったり他疾患により内服できない方は外用薬による治療となるが、高齢者の肥厚が著しい足の爪白癬に対しては、QOL の改善を図るために爪切除等の処置を行っている。

【手術・陥入爪治療】

局所麻酔による良性皮膚腫瘍切除および皮膚癌や表皮内癌に対しての手術を行った。陥入爪に対しては、痛みの除去を目的としてのテーピングや薬物治療のほか、装具による矯正治療、ワイヤー法、局所麻酔下のフェノール法など、症状に応じた治療を選択している。

【褥瘡診療】

在宅や施設等で繰り返しデブリドマンを必要とするような重症褥瘡は発生している。介護力やひとり暮らし世帯など社会的問題が背景にあり、知識の普及と早期に適切な対応を行うための啓発は引き続き必要である。褥瘡ケアチームによるケアや現場での指導により、問題となる場合に皮膚科医が診察を行う体制として、スムーズな診療が行えている。

■ 2025 年度の課題

引き続き非常勤 1 名にて週 3-4 日の診察日となる予定である。予約が取りにくい状況ではあるが、他科、地域と連携し、皮膚科としての必要なスキルと情報を提供することを主として継続したい。

泌尿器科

主 な 体 制

医師体制

科長（医長）： 金子 裕生
 医師： 野村 昌史（非常勤）
 医師： 大塚 保宏（非常勤）
 医師： 吉原 忠寿（非常勤）



金子 裕 生

日本学会等認定資格

日本泌尿器科学会専門医	4	金子 裕生、非常勤泌尿器科医師 3 人
日本泌尿器内視鏡・ロボティクス学会泌尿器ロボット支援手術プロクター	1	金子 裕生

活 動 報 告

■ 2024 年度のまとめ

泌尿器科は、2016 年度から非常勤医師のみの体制であったが、2022 年度から、常勤医師 1 名と非常勤医師 3 名で診療を行っている。外来は、週 5 日（月、火、水、木、金）で、入院および手術に対応可能である。開腹手術や鏡視下手術、ロボット支援手術が必要な場合には、他施設へ紹介している。

■ 2025 年度の目標・課題

2025 年度についても、同様の体制で診療を継続していく。また、泌尿器科領域の医療の進捗（診療ガイドラインの変更）に合わせて、必要な設備や器材を更新および導入していく。

耳鼻咽喉科

主 な 体 制

医師体制

医師（医長）：	松山 敏之（非常勤）
医師	： 櫻井みずき（非常勤）
医師	： 安塚 孝治（非常勤）
医師	： 内田 美帆（非常勤）
医師	： 小川由紀子（非常勤）

日本学会等認定資格		
日本耳鼻咽喉科頭頸部外科学会認定耳鼻咽喉科頭頸部外科専門医	4	松山 敏之・櫻井みずき・安塚 孝治・内田 美帆
日本耳鼻咽喉科頭頸部外科学会認定耳鼻咽喉科頭頸部外科指導医	1	松山 敏之
日本アレルギー学会認定アレルギー専門医	1	松山 敏之
難病指定医	2	松山 敏之・櫻井みずき

活 動 報 告

■ 2024 年度のまとめ

- ・2024 年度は、月曜日から土曜日の午前中に耳鼻咽喉科診療を行った。
 - ・2024 年度 耳鼻咽喉科総外来数：
 - 7,608 人（1 か月平均 634 人）
 - 2024 年度 入院数：37 人
- 外来数は前年度より増加し、入院数は前年度と同数であった。

主な入院疾患は耳鼻咽喉科領域の感染性急性炎症疾患であり、その他にはめまい症などが見られた。現在、常勤医が不在のため、入院管理については外科および総合診療部の医師にご協力をお願いしている。

当院は、県北毛地区における耳鼻咽喉科・頭頸部外科診療の拠点となる地域中核病院としての役割を担っている。

耳鼻咽喉科の一般診療に加え、以下のような特徴ある治療を行っている：

- ・中耳炎などに対する日帰り手術
- ・めまいの精密検査
- ・好酸球性副鼻腔炎に対する生物学的製剤治療
- ・アレルギー性鼻炎に対するアレルゲン免疫療法

また、県北毛地区の頭頸部癌患者の通院・終末期緩和ケアの受け入れ先としても機能している。

緊急性・重症度の高い症例、悪性疾患、手術が必要な症例、追加精査を要する症例については、群馬大学医学部附属病院や前橋赤十字病院などの高次医療機関へ紹介している。

■ 2025 年度の課題

常勤医不在により、当院で対応可能な精査・加療には限界がある。県北毛地区における耳鼻咽喉科・頭頸部外科診療のさらなる充実と質の向上が今後の大きな課題である。

連携協力医の先生方には、平素より多大なるご支援・ご協力を賜り、心より感謝申し上げます。今後とも変わらぬご指導・ご鞭撻のほど、何卒よろしくお願い申し上げます。

（群馬大学耳鼻咽喉科・頭頸部外科 松山 敏之）

精神神経科

主 な 体 制

医師体制

科長（部長）：藤平 和吉

医師：渡會 昭夫（非常勤）



藤 平 和 吉

日本学会等認定資格		
厚生労働省 精神保健指定医	2	渡會 昭夫・藤平 和吉
厚生労働省 精神保健判定医	1	藤平 和吉
日本精神神経学会 指導医	1	藤平 和吉
日本精神神経学会 専門医	2	渡會 昭夫・藤平 和吉
日本精神神経学会 認知症診療医	1	藤平 和吉
日本総合病院精神医学会 リエゾン指導医	1	藤平 和吉
日本総合病院精神医学会 リエゾン専門医	1	藤平 和吉
子どものこころ専門医機構 指導医	1	藤平 和吉
子どものこころ専門医機構 専門医	1	藤平 和吉
日本児童青年精神医学会 認定医	1	藤平 和吉
日本サイコオンコロジー学会 登録精神腫瘍医	1	藤平 和吉
厚生労働省 精神腫瘍学の基本教育に関する指導者研修会修了	1	藤平 和吉
日本緩和医療学会 緩和ケア研修会新開催指針の周知のための指導者研修会修了	1	藤平 和吉
日本医師会 認定産業医	1	藤平 和吉
臨床研修指導医	1	藤平 和吉
難病指定医	1	藤平 和吉

活 動 報 告

■ 2024 年度まとめ

2024 年 4 月から常勤医師が 12 年振りに確保され「常勤 1 名＋非常勤 1 名」の医師 2 名体制での診療となった。このため、外来は月曜～土曜までの週 6 日対応が可能となり、新規患者の受け入れも行えるようになった。精神科デイケアも月曜～金曜の週 5 日対応となり、利用者数は前年比 108%と増加傾向となっている。

院内の他科連携は、①コンサルテーション依頼に応じやすくなったこと、②がん患者の精神心理学的支援として院内緩和ケアチームへの精神科医の参加が可能となったこと、が挙げられる。

院外の公的業務への支援は、県や市区町村の健康保健相談や学校教育委員会への参加、地域小中学校での「こころ」を題材にした授業の実践、裁判所や検察等への精神医学的知見の提供などを積極的に行い、別紙記載の通りの実績となっている。

■ 2025 年度の課題

外来診療体制は非常勤医師の若干の単位減以外に大きな変更はなく、2024 年度体制の維持・発展に努めたい。月間 600 名の再来かかりつけ患者への対応とともに、年間 250 名程度の新規患者（2024 年度実績）の対応も継続していきたい。

また、院内の他科連携は 2024 年度の緩和ケアチームへの参画に加え、本年度は認知症ケアチームへの精神科医の参加も開始した。総合病院精神科としての役割を十分に自覚して、院内他科とのさらなる連携（コンサルテーション・リエゾン精神医学）の充実を目指したい。

院外の公的業務への支援は、2024 年度同様に行っていきたい。

看護部長室

主 な 体 制

看護部長	：	布施 正子
副看護部長兼医療安全管理者	：	須田 良子
看護教育・学生対策担当師長	：	立木 歌織
感染管理認定看護師長	：	松井 奈美
看護師（育休中）	：	11人



布 施 正 子

日本学会等認定資格

認定看護管理者	2	布施 正子、立木 歌織
母性看護専門看護師	1	立木 歌織
感染管理認定看護師	1	松井 奈美
アドバンス助産師	1	立木 歌織
群馬県糖尿病療養指導士	1	須田 良子

活 動 報 告

■ 2024 年度のまとめ

新卒確保	：	8 名
新人の退職者	：	1 名
看護師の退職率	：	8.7%

2024 年度の診療報酬改訂では、医療・看護必要度の厳格化や地域包括医療病棟の新設など医療機能の明確化と分化が促進された。また少子高齢化が益々進捗するなかで、外来看護師の果たす役割も変化が求められる。日本看護協会の研修プログラム「外来における在宅療養支援能力向上のための研修」を元に日本医療福祉生協連が開催し、当院からも 36 名が受講した。地域の特徴を踏まえつつ在宅療養を支える外来看護師の役割が更に期待される。医師の働き方改革がはじまり、タスクシフト・シェアが促進されるなかで、看護師の特定行為研修受講者も増えつつある。また、日本看護協会が提示した看護補助者のラダーに沿って当院のラダーを更新した。患者の療養上の世話の質向上に、看護師と看護補助者との協働は重要である。また、認知症ケアチームの活動により身体拘束最小化の取り組みも進み、身体拘束の実施率は大きく減少した。

労働環境の整備として、6 月から発熱外来における Web 問診の導入や 7 月からは夜間看護配置加算 16 対 1 の取得、また看護師確保のための新たなリクルート会社との契約など、様々な面から取り組んだ。

■ 2025 年度の課題

引き続き、人材確保と育成を推進する。2024 年度は、コロナ禍以降数年ぶりに高校生サークルが復活した。看護部教育委員会中心に、キャリアラダーの更新や取得者を増やすとりくみや、看護補助者については 2024 年度に更新した看護補助者のラダーに沿った教育を進めていく。また看護分野における IT、AI 化も徐々に進めていきたい。今年度は医療機能評価の更新もあり、改めて基準・手順の整備や看護の質向上にも努めていく。

外来 A（内科系外来）

主 な 体 制

副看護部長兼看護師長	： 菅家まなみ
主 任	： 関上 美紀
副 主 任	： 加藤 政文・川島 千春
看 護 師	： 24人
准看護師	： 6人
精神保健福祉士	： 1人
看護補助者	： 7人



日本学会等認定資格		
日本糖尿病療養指導士	2	関上 美紀・堀内小百合
群馬県糖尿病療養指導士	1	林 美知江
日本循環器学会心不全療養指導士	1	小林 智子
インターベンションエキスパートナース	1	原澤 知恵

活 動 報 告

■ 2024 年度のまとめ

内科系は内科・総合診療科・精神科・光学医療室を備えている。10月より病棟と一緒であった小児科が外来部門となり副主任を配置、業務の見直しを積極的におこなった。

外来全体で在宅にも目を向け「外来における在宅療養支援能力の向上」研修を常勤職員全員が受講した。さらに患者満足度向上として接遇研修も複数回実施し外来の質を高めるための研修会にも取り組んだ。

看護外来では昨年度心不全療養指導士が誕生したことから、心不全療養指導士が中心となり心不全療養指導に力を入れた。糖尿病療養指導、フットケア、禁煙外来と他の看護外来も継続し行っている。

光学医療室では心臓カテーテル検査や内視鏡検査治療など多くの検査・治療を実施、安全に治療が行えるように看護師のスキル向上にも取り組んできた。

■ 2025 年度の課題

今年度は昨年研修した「外来における在宅療養支援能力の向上」や「接遇」について臨床の場で活用し外来全体の質の向上に取り組みたい。

また光学医療室でも新規治療も多くなっているもので安全に治療が行えるように引き続き看護師のスキル向上に努めたい。

外来 B（外科系・救急科）

主 な 体 制

副看護部長兼看護師長	：	菅家まなみ
副 主 任	：	山本 典子
看 護 師	：	15人
准看護師	：	1人
視能訓練士	：	3人
看護補助者	：	6人



日本学会等認定資格

皮膚・排泄ケア認定看護師	1	松本 厚子
群馬県糖尿病療養指導士	2	飯田 模・松井恵美子

活 動 報 告

■ 2024 年度のまとめ

外科系外来は救急外来・外科・脳外科・皮膚科・整形外科・泌尿器科・耳鼻科・眼科を備えている。

外来全体で在宅にも目を向け『外来における在宅療養支援能力の向上』研修を常勤職員全員が受講した。さらに患者満足度向上として接遇研修も複数回実施し外来の質を高めるための研修に取り組んだ。

救急外来では地域でできる限り完結するために『断らない医療』を実践。救急車搬入人数に関しては今年度 2924 人、昨年より 100 名以上上回る人数となった。また安全な医療を提供していくため、業務改善や研修会・学会参加などへ積極的に参加、看護のスキルアップにも取り組んできた。

■ 2025 年度の課題

研修で学んだことを生かし、安全な医療を提供できるよう引き続き看護師のスキル向上に取り組んでいきたい。また患者の満足度を上げるための取り組みとして、接遇にも力を入れていきたい。

3A・HCU 病棟

主 な 体 制

看護師長 : 原澤 聖
 主 任 : 茂木めぐみ
 副 主 任 : 竹内 吟江、小林 祐介
 看 護 師 : 40 人
 看護補助者 : 3 人



日本学会等認定資格

日本循環器学会心不全療養指導士	4	星野 卓央・羽鳥 陽子・小林 祐介・新居 沙織
3 学会合同呼吸療法認定士	3	柴崎 芳光、原澤 聖、星野 佳祐
日本糖尿病療養指導士	1	高橋 秀徳

活 動 報 告

■ 2024 年度のまとめ

- HCU では「断らない救急の実践」に向け救急外来から積極的に重症患者の受け入れを行い病床稼働率は 94.2%と高稼働を維持することができた。
- 病棟内チーム活動（せん妄対策、在宅支援、抑制ゼロ、心臓リハビリ、RCT）の推進をはかり徐々に活動の成果も見られており今後も継続して取り組みを進める。
- 病棟内での学習会も定期的に行われ職員一同意欲的に取り組むことができた。
- ACP の推進を目標に掲げ心不全患者を中心に 18 件の「生き方ノート」の聴取を行い、意志決定支援に結び付けた。

■ 2025 年度の課題

- 診療報酬の改定による施設基準と役割の再確認を行い、体制整備を進める。
- HCU では医療の専門性が高まる中、変化に対応するため看護師の育成をより一層進める必要がある。HCU の基礎知識の評価指標を作成し看護師の知識技術の底上げを図ると共に DPNS（ディパートナーシップナーシング）の導入により職員のレベルアップを進めたい。
- 3A 病棟では心不全療養指導士を中心として循環器疾患に対する療養指導の充実を進める。また循環器緩和ケアチームを立ち上げ増加数する心不全患者の終末期ケアの質の向上を図る。
- 患者を生活者として捉える視点を育成するため看護カンファレンスを充実させる。

4A 病棟

主 な 体 制

看護師長	：	柴崎 芳光
主 任	：	増田 綾
副 主 任	：	星野 朋子
看 護 師	：	26 人
准看護師	：	2 人
介護福祉士	：	1 人
看護補助者	：	2 人



日本学会等認定資格

群馬県糖尿病療養指導士	1	増田 綾
3 学会合同呼吸療法認定士	1	柴崎 芳光

活 動 報 告

■ 2024 年度のまとめ

- ・周術期病棟として外科、整形外科、脳神経外科、泌尿器科の患者を積極的に受け入れ、全ての診療科の手術件数が増加した。慌ただしく入院患者が入れ替わり多忙を極める状況もあった。2024 年度は歯科の全身麻酔手術の受け入れ体制を整備し 6 件の手術患者を受け入れた。

・手術件数（2024 年度 入院手術のみ）

診療科	外科	整形外科	脳神経外科	泌尿器科	歯科
手術件数 2024 年度 (2023 年度)	420 件 (382 件)	390 件 (390 件)	25 件 (15 件)	184 件 (150 件)	6 件

- ・ストマケアや抑制患者の評価、看護計画の評価など毎日看護カンファレンス行われるようになり職員間の情報共有がされ、統一したケアの提供に繋がった。特にストマケアについては意見交換を通して職員の知識技術を高める結果となり今後も質の高いケアを目指し充実したカンファレンスを続けたい。

■ 2025 年度の課題

- ・周術期病棟ではあるが終末期ケアの必要な患者も多いため緩和ケアの関わりを充実する。緩和ケアチームと連携し終末期患者の生活の質を高めその人らしい時間が過ごせるよう関わっていきたい。
- ・一部プライマリー看護を取り入れ、入院から退院後の生活を意識し、患者を包括的に支援できる人材育成を進めたい。退院後訪問やケアカンファレンスに参加し他職種との連携を意識できるような機会を積極的につくりたい。
- ・業務効率化やタスクシェア、タスクシフト等業務改善を進める。

4B 病棟（地域包括ケア病棟）

主 な 体 制

看護師長	：	星野 晶子
主 任	：	関根美知子
副 主 任	：	笛木佳津江
看 護 師	：	21人
准看護師	：	1人
介護福祉士	：	5人
看護補助者	：	6人



日本学会等認定資格		
認知症認定看護師	1	石原千恵子
摂食・嚥下障害認定看護師	1	根津えり子
日本糖尿病療養指導士	1	星野 晶子
NST 専門療法士	1	森下 光

活 動 報 告

■ 2024 年度のまとめ

- 2024 年度診療報酬改定による算定要件のクリアをするためのシステムの構築を行った。転棟割合 65%未満をクリアするため、直入院が可能な疾患を明示した。夜間も適応患者がいれば受け入れを行っている。算定要件はクリアできた。
- 特定行為研修が終了した。

■ 2025 年度の課題

- 直入院の受け入れの拡大が求められ、多様な疾患や病状の患者を受け入れているため、看護職員のスキルの向上が必要となる。定期的な学習会を開催し知識とスキルの向上を図っていく。
- 新人看護師の受け入れを行う。

5A 病棟

主 な 体 制

師 長	：	阿部 冴子
主 任	：	柴崎 恵・鹿野亜里砂
副 主 任	：	高橋 聡美
看 護 師	：	27 人
准看護師	：	5 人
介護福祉士	：	1 人
看護補助者	：	3 人



日本学会等認定資格

認知症認定看護師	1	鹿野亜里砂
日本心理学会認定心理士	1	中林八千恵
日本糖尿病療養指導士	1	星野 香織
アドバンス助産師	1	高橋 聡美

活 動 報 告

■ 2024 年度のまとめ

総合診療科・消化器内科・小児科・新生児治療室の混合病棟である。

総合診療科では急性期から慢性期まで幅広い患者の受け入れを行ってきた。科を超えた診療も多く、専門科の医師と協力し治療を行ってきた。高齢者の入院が多く、認知症や退院調整に時間がかかる患者が多い傾向が続き、ベッド運用に苦労した。

消化器内科では地域で唯一の治療ができる医療機関として積極的な受け入れを行ってきた。ERCP は 190 件・胃 ESD14 件・食道 ESD2 件・大腸 ESD2 件と前年度より多くの受け入れを行った。また、今年度は消化器医師 2 名増員となり、超音波内視鏡（EUS）・超音波内視鏡下穿刺吸引術（EUS - FNA）が新たに導入となった。EUS42 件・EUS - FNA8 件を行い、診断・治療に結びつけてきた。

小児科は小児二次救急の受け入れや地域唯一の入院治療ができる小児科として重要な役割を担ってきた。当院産婦人科が群馬県北部で唯一の入院治療可能な産婦人科であり、新生児治療室としての役割も大きい。安心した出産とともに安心した治療ができるよう家族に寄り添った看護を心がけてきた。

10 月より D ブロック（小児科外来）が病棟管理から外来管理と変更になった。看護業務の改善、係の見直しを行い、スタッフの働きやすさを検討した。

■ 2025 年度の課題

引き続き、他院からの受け入れを積極的に行い、地域の役割を果たしていく。

早めのカンファレンスや退院調整を行い、稼働率を考えたベッド運用を行っていく。

5B 病棟

主 な 体 制

師 長 : 小野里千春
 主 任 : 南雲 佳奈
 副 主 任 : 大竹菜々美
 看 護 師 : 27 人
 看護補助者 : 3 人



日本学会等認定資格

日本糖尿病療養指導士

2

青木 由香、生方 雅子

活 動 報 告

■ 2024 年度のまとめ

内科（呼吸器、腎臓、内分泌）周術期以外の外科の混合病棟である。化学療法室を兼務。COVID－19 入院患者数は減少傾向だが感染拡大に留意し対応している。病床稼働は 98.8%、70 歳以上が 7 割を越える。化学療法室月平均 96.8 件と昨年度を上回っている。

病棟化学療法月平均 22.8 件。糖尿病教 10 件。腹膜透析の学習会後、患者の受け入れ 1 件であった。

■ 2025 年度の課題

- ・腹膜透析患者の受け入れ。
- ・病棟業務改善。
- ・抑制をしない取り組みの実践。

6A 病棟

主 な 体 制

師 長	：	土澤 洋子
主 任	：	牧野真奈美・高橋 裕子
副 主 任	：	石井 友理
助 産 師	：	22人
看 護 師	：	3人
准看護師	：	1名
看護補助者	：	1名



日本学会等認定資格

アドバンス助産師	6	土澤 洋子・牧野真奈美・高橋 裕子・石井 友理・角田 明美・悴田 成美
----------	---	-------------------------------------

活 動 報 告

■ 2024 年度のまとめ

当科は群馬県北部で唯一の入院治療可能な産婦人科である。利根沼田、吾妻、渋川地域を中心に近県在住者、里帰り出産のかたにご出産や婦人科治療を行っている。外国籍の入院患者も増加傾向にあり、安心して治療やご出産・育児が行えるように日々努力をしている。

地域においては、「命・性の授業」で学校教育に携わり、市町村と協力し産後ケア事業「宿泊型」「訪問型」を実施し、地域の方々の側で寄り添った助産師活動を行っている。

混合病棟のため、女性限定で眼科・総合診療科・内科・整形外科・外科・泌尿器科・脳神経外科・耳鼻咽喉科と複数の診療科の入院も受け入れている。当科の看護職員は全員が女性のため、特に乳癌手術は患者様の精神的な安心感も、得られているのではないかと感じている。

■ 2025 年度の課題

- ・産後に孤立してしまう母親を予防し、楽しく育児が行えるような支援体制の構築。

6B 病棟（回復期リハビリテーション病棟）

主 な 体 制

師 長	：	塩野 愛性
主 任	：	西巻 定子
副 主 任	：	萩原とよみ
看 護 師	：	14 人
准看護師	：	2 人
介護福祉士	：	4 人
理学療法士	：	11 人
作業療法士	：	7 人
言語聴覚士	：	1 人
看護補助者	：	1 人



活 動 報 告

■ 2024 年度のまとめ

回復期リハビリテーション病棟入院料 1 に対し、在宅復帰率：78.5%、入院重症患者割合：46.96%、重症患者における退院時 FIM16 点以上改善率：69.9%であった。年間延べ患者数は 11978 人で一日平均：32.8 人、平均稼働率：99.4%、平均在院日数：59.0 日。疾患別割合は、運動器リハビリ：63.6%、脳血管リハビリ：25.1%、廃用症候群リハビリ：11.3%で、年間平紹介患者比率：5.2%であった。

病棟入院パンフレットを患者用と家族用の両方に分け、病棟の特徴がより理解しやすいよう見直しをおこなった。昨年作成したリハビリ面談シートの活用を継続し、家族に ADL やリハビリの状況がより伝わるよう使用し、退院の時期や退院先を考えるため役立てた。7 月下旬～8 月上旬にかけにコロナ感染によるクラスターの発生があった。中国国籍の入院受け入れにより、言葉の壁による対応の難しさを感じた。医療者側（日本人）の常識に合わせるのではなく、相手の行動に合わせる必要性を学べた。脳外科患者の増大により重症者の入院が増え、食事介助者が多くなった時期は朝・夕の時差を増やして対応した。

ドクターハリーの要請が発生し急変対応について振り返りを行い、初動操作について学習会を行った。急変時に迅速に対応できるよう次年度以降も定期的な学習をしていきたい。

■ 2025 年度の課題

医療機能評価に向け、他職種がそれぞれの強みを活かし取り組んでいきたい。また、患者、家族を中心とした退院調整を早期に行い退院に向け患者が意欲的にリハビリに取り組めるよう援助していく。プライマリーナーシングを実施しているが面談やカンファレンス、家屋訪問に同行できていない現状があるので参加できるよう取り組んでいきたい。またコスト意識を持って病棟運営、ベットコントロールを実施し稼働率 100%を維持していく。

手術・中央材料室

主 な 体 制

看護師長	：	生方真理子
主 任	：	渡辺 麻衣
副 主 任	：	千明咲姫恵
看 護 師	：	12 人
准看護師	：	1 人
看護補助者	：	2 人



日本学会等認定資格

第 2 種滅菌技師	1	宮前 雄一
周術期管理チーム認定制度	1	吉澤 好一
インターベーションエキスパートナース	1	吉澤 好一

活 動 報 告

■ 2024 年度のまとめ

<手術室>

2024 年度の手術件数は 1,818 件（前年比＋ 55 件）、うち麻酔科症例 1,051 件（前年比＋ 44 件）科別手術件数は、外科 470 件（前年比＋ 17 件）整形外科 493 件（前年比－ 6 件）産婦人科 225 件（前年比＋ 19 件）泌尿器科 189 件（前年比 50 件）眼科 399 件（前年比＋ 22 件）脳外科 26 件（前年比＋ 6 件）皮膚科 52 件（前年比－ 16 件）と手術件数・麻酔科症例とも増加した。歯科の抜歯手術を開始し 6 件行った。

当院は利根沼田地域で断らない救急を元に昼夜問わず緊急手術にも対応している。また群馬県北部で唯一の分娩・手術施設として地域の役割を理解し、定期的な学習会や学会参加、訓練を行い個々のスキルアップを行った。

当院では安心して手術が受けられるよう外来・入院センター・病棟と連携し、パンフレットを用いて統一した説明を行い、手術室では手術室看護師が術前・術後訪問を行い患者の不安を軽減できるよう心掛けている。

<中央材料室>

病院、利根保健生協の事業所全体の洗浄滅菌を請けおい、安全で安心できる医療機器の提供に努めて

いる。スタッフ個々もスキルアップのため群馬県中央業務研究会へ参加。医療現場における滅菌保証のガイドラインに則りに実施している。

1 日あたりの洗浄機の運行回数

洗浄機 2 台 8.7 回 / 日

1 日あたりの滅菌器の運行回数

高圧蒸気滅菌器 2 台 3.9 回 / 日

プラズマ滅菌機 1 台 2.2 回 / 日

■ 2025 年度の課題

<手術室>

手術室看護師の役割は周術期における患者の安全を守り、手術が円滑に遂行できるように専門的知識と技術を提供することにある。2025 年の課題は、手術室ラダーを活用しスキルアップと、事例の振り返りを行い共通認識とすることとする。また、他職種でコミュニケーションをとり、心理的安全性が保たれた職場で医療安全の強化と、術前外来での手術室看護師の説明し、より術前から関わり患者と家族の不安軽減に取り組みたい。

<中材室>

滅菌技師の資格取得をめざし学習し、より安全で質の高い器材の提供を目指す。

透析室

主 な 体 制

医師体制

師 長 : 金井ゆうこ
主 任 : 香川 文枝
看 護 師 : 9 人
准看護師 : 2 人



活 動 報 告

■ 2024 年度のまとめ

シャントカルテを活用し、シャントトラブルを未然に防いでいる。しかし入院後のシャント閉塞が多く、緊急 PTA を行う頻度が高かった。今年度のシャント DSA42 件、PTA64 件 計であった。

今年度はエコー下穿刺について勉強会を行い、穿刺困難患者に対し穿刺が可能となった。シャント異常に対してもエコーを用いて、早期発見に努めている。

足回診では気になる患者の足浴、爪切り実施し足病変の改善につなげる事ができた。必要な患者に対しては、月 1 回の回診だけでなく、週 1 回の回診を行っている。

認知機能低下している患者に対し、ユマニチュードを用いて対応している。しかし ADL が下がってしまい、施設入所を余儀なくされる患者がいる。できるだけ自宅通院ができるよう、家族面談、MSW の介入を早め、自宅から透析に通えるよう体制を強化している。

■ 2025 年度の課題

- ・月 1 回の学習会の開催を目標とし、学習会を中心として看護の向上に努める。
- ・透析導入パスを用いて病棟と統一した患者教育を行っていく。
- ・患者の生活変化を情報共有し、介護申請や家族教育などを行っていく。
- ・足回診を 1 回 / 月行っており、異常発見時は皮膚科へつなげていく。

検査室

主 な 体 制

医師体制

技師長 : 関根美智子

主 任 : 林 美奈

副主任 : 稲垣 圭子

深代やす子

宇敷 明人

技術者 : 検査技師: 20 人、看護師 4 人



日本学会等認定資格

細胞検査士	4	稲垣 圭子・深代やす子・森川 容子・真下 祐一
日臨技認定病理検査技師	2	深代やす子・森川 容子
超音波検査士	2	林 美奈・高木ゆかり
日本糖尿病療養指導士	1	宇敷 明人
NST 専門療法士	2	関根美智子・荻野 亮子
日本 DMAT 隊員	1	荻野 亮子

活 動 報 告

■ 2024 年度のまとめ

遺伝子検査機器の有効活用では、マイコプラズマ、百日咳菌の PCR 検査を開始した。マイコプラズマにおいては、薬剤耐性も判定可能で、臨床に貢献できている。循環器科については、心肺負荷試験を月に 20 件程度実施、予約外の超音波検査にも対応できた。

12 月末で 1 名退職となり、体制的に厳しくなったが、応援体制を組み日常業務に支障がないよう対応できた。検査件数も増え、業務も増えているが、部門にとらわれない応援体制で対応できた。

ここ数年、若手の退職が続いているので、継続して働ける・働きたいと思える職場を目指したい。

■ 2024 年度診療実績

項 目	件 数	前年度比 (%)
尿・一般検査	212,350	101.3
血液検査	335,555	105.0
生化学検査	973,110	105.5
細菌検査	20,111	100.7
生理検査	20,151	102.8
病理検査	4,950	104.9
外部委託	38,845	102.6

■ 2025 年度の課題

- ・業務拡大……循環器科の検査件数増加に向け、超音波検査や心肺運動負荷検査ができる技師の育成
- ・チーム医療への参加……心不全早期発見プロジェクト、感染防止対策チーム (ICT)、抗菌薬適正使用支援チーム (AST)、糖尿病教室、心臓リハビリチームへの参加
- ・研修医への指導……研修プログラムに沿って研修医への研修を充実させる
- ・研究発表への取り組み……日常業務で取り組んできた内容をまとめ、研究発表につなげていく
- ・経営改善に向けて……負荷心エコーへの協力や心肺負荷試験 (CPX) の件数を増やし、経営改善に取り組む
- ・職場づくり……ハラスメントがなく、安心して意見が言える職場づくりを目指す

放射線室

主 な 体 制

放射線科 読影医	:	山田 宏明
技 師 長	:	本多 拓晶
主 任	:	中村 文彦
副 主 任	:	大竹 毅
技 術 者	:	診療放射線技師 10 人 (内パート 1 人)



日本学会等認定資格

日本医学放射線学会放射線診断専門医	1	山田 宏明
健診マンモグラフィー撮影技術認定	3	栗原 真実・井上 美華・割田 朱音
放射線管理士	1	本多 拓晶
ICLS インストラクター	1	大竹 毅
日本 DMAT 隊員	1	大竹 毅
放射線機器管理士	1	本多 拓晶
医療画像情報精度管理士	1	本多 拓晶

活 動 報 告

■ 2024 年度診療実績

	件数	前年比
一般撮影	35,850	105%
C T 検査	11,437	109%
MRI 検査	3,293	104%
健診関連	8,170	98%
総検査数	55,788	106%

■ 2024 年度のまとめ

放射線科医師の指示のもと、CT や MRI の撮影を行っている。

マンモグラフィー担当は新たに有資格者が 1 名増え、全て女性が対応している。ERCP、CT、血管撮影が増加傾向である。TV 透視装置を更新した。

■ 2025 年の課題

進化する放射線診断技術を学習してチーム医療に貢献する。人材育成を中心課題とし、当直対応や業務をさらに発展させる。

栄養管理室

主 な 体 制

室 長	：	林 和代（管理栄養士）
副 主 任	：	諸田 梢（管理栄養士） 櫻井 万幾（管理栄養士）
管理栄養士	：	10 人
栄 養 士	：	5 人
調 理 師	：	6 人
調 理 員	：	5 人
事 務 員	：	1 人



日本学会等認定資格

栄養サポートチーム専門療法士	2	林 和代・諸田 梢・千吉良萌美
日本糖尿病療養指導士	7	林 和代・諸田 梢・櫻井 万幾・杉木 裕子 石坂 薫・千吉良萌美・信澤 妙佳
人間ドック健診情報管理指導士	1	林 和代
栄養経営士	1	林 和代・櫻井 万幾

活 動 報 告

■ 2024 年度のまとめ

- ・診療報酬改定に伴い、NST が中心となり入院時の栄養スクリーニングに MUST を導入し、院内での栄養管理に対する意識が高まった。栄養管理計画書も GLIM 基準を用いた栄養評価に変更し、10 日ごとの体重と下腿周囲長の測定を管理栄養士が行い、看護業務の負担軽減に繋がった。
- ・階毎の管理栄養士担当制を導入し、各科カンファレンス、外科と呼吸器内科の回診に参加することで、気になる患者への訪問が増え、患者個々の栄養管理が充実した。
- ・日本栄養治療学会関越支部学術集会で、3 演題発表した。

項 目	件数	月平均	前年比
外来栄養指導	1,741	145	87%
入院栄養指導	1,692	141	164%
集団栄養指導	22	2	65%
糖尿病透析予防指導	401	33	120%
栄養サポートチーム加算	1,581	132	68%
早期栄養介入管理加算（早期経腸）	1,109	92	482%
早期栄養介入管理加算（早期経腸以外）	1,302	109	51%
栄養情報連携料	245	20	

■ 2025 年度の課題

- ・厨房内業務従事者の人員確保
- ・病棟担当制導入、栄養管理の充実、栄養指導や栄養情報連携料の算定。医師、看護師の負担軽減。
- ・嚥下調整食（ムース食）の栄養価アップ
- ・再加熱カート導入に向けての準備を進める

【学会発表】

- 日本栄養治療学会 関越支部 第 10 回支部学術集会
- ・管理栄養士 櫻井万幾「嚥下調整食改善チームの立ち上げから現在までの取り組みについて」
 - ・管理栄養士 石坂薫「HCU 入院直後より早期栄養介入し褥瘡の改善に繋がった症例」
 - ・管理栄養士 千吉良萌美「当院における早期栄養介入管理加算の取り組みについて」

リハビリテーション室

主 な 体 制

技 士 長 : 諸田 顕 (理学療法士)
 主 任 : 石井 亮 (理学療法士)
 平沢 千尋 (理学療法士)
 浦川 美栄 (作業療法士)
 原澤 陽二 (言語聴覚士)
 志賀 達也 (理学療法士)
 茂木 崇 (理学療法士)
 副 主 任 : 勝見佐知子 (歯科衛生士)
 岩東 裕之 (作業療法士)
 清水 雅仁 (作業療法士)
 木暮 拓美 (作業療法士)
 理学療法士 : 33 人
 作業療法士 : 17 人
 言語聴覚士 : 4 人
 歯科衛生士 : 1 人



日本学会等認定資格		
新潟大学大学院博士課程修了	1	原澤 陽二 (言語聴覚士)
茨城県立医療大学大学院修士課程修了	1	茂木 崇 (理学療法士)
医科歯科連携・口腔機能管理 認定歯科衛生士	1	勝見佐知子 (歯科衛生士)
糖尿病予防指導 認定歯科衛生士	1	勝見佐知子 (歯科衛生士)
NST 専門療法士	2	原澤 陽二・林 茂宏 (言語聴覚士) 七五三木史拓 (理学療法士)
認定訪問療法士	1	木暮 拓美 (作業療法士)
運動器認定理学療法士	2	茂木 成介・金子 達也 (理学療法士)
呼吸器認定理学療法士	1	高山 翔平 (理学療法士)
心臓リハビリテーション指導士	4	狩野進之助・増田 睦・志賀 達也 平井 優香 (理学療法士)
3 学会合同呼吸療法認定士	5	諸田 顕・志賀 達也・高山 翔平 西山 早希 (理学療法士)・井野 巧 (作業療法士)
認知症ケア専門士	2	増田 睦 (理学療法士)・浦川 美栄 (作業療法士)
群馬県糖尿病療養指導士	2	七五三木史拓 (理学療法士) 勝見佐知子 (歯科衛生士)
がんリハビリテーション研修修了	23	理学療法士 12 人、作業療法士 8 人 言語聴覚士 3 人
介護予防推進リーダー	7	理学療法士 7 人
地域包括ケア会議推進リーダー	7	理学療法士 7 人
フレイル対策推進マネジャー	4	理学療法士 4 人
健康運動指導士	1	宮田 恵章 (理学療法士)
生活行為向上マネジメント	2	浦川 美栄・岩東 裕之 (作業療法士)
ST 介護予防推進コース	2	原澤 陽二・林 茂宏 (言語聴覚士)
ST 地域包括ケア推進コース	2	原澤 陽二・林 茂宏 (言語聴覚士)

活動報告

■ 2024 年のまとめ

新総合事業における地域への参加について、2023 年度は 67 回延べ 76 人の職員を派遣したが、2024 年度は 119 回 124 人の職員を派遣した。地域包括ケアシステム構築に向けて自治体や他事業所との連携が進展している。

切れ目ないサービスを目標に一般病棟の祝日体制を実施した。

■ 2025 年の課題

事業の質の強化及び一般病棟の切れ目ないサービスを目標にスタッフを確保する事。

地域での介護予防の推進・全病棟でのがんリハビリテーションの提供・心臓リハビリテーションの対応強化及びリスク軽減・呼吸器疾患の入院対応や COPD の外来対応の強化・糖尿病患者の教育の推進・栄養と運動の視点での対応・認知症患者の対応の質の強化・ドライブシミュレーターの運用の推進。

サービスの質の向上のため学会等認定資格取得者を増やす。

職場人数の増員により教育体制の充実を推進する。

疾患別リハビリテーション料等	2023年度	2024年度	前年比
がんリハビリテーション料	3,003単位	2,636単位	88%
脳血管リハビリテーション料Ⅰ	27,972単位	34,289単位	123%
廃用リハビリテーション料Ⅰ	31,296単位	33,498単位	107%
運動器リハビリテーション料Ⅰ	88,287単位	75,448単位	85%
呼吸器リハビリテーション料Ⅰ	14,851単位	13,991単位	94%
心臓リハビリテーション料Ⅰ	13,532単位	12,898単位	95%
合計	178,941単位	172,760単位	97%

臨床工学室

主 な 体 制

技 士 長 ： 林 貴幸
主 任 ： 福田 浩嗣
臨床工学技士 ： 7 人



日本学会等認定資格

透析療法合同専門委員会 透析技術認定士	1	福田 浩嗣
日本臨床工学技士会 認定血液浄化臨床工学技士	1	福田 浩嗣
日本心血管インターベーション治療学会心血管インターベンション技師	2	福田 浩嗣・外川 拓実
ME 技術教育委員会 第 2 種 ME 技術実力検定	4	林 貴幸・福田 浩嗣・佐渡 拓斗 竹部 悠希
3 学会合同呼吸療法認定士認定委員会 3 学会合同呼吸療法認定士	4	福田 浩嗣・外川 拓実・佐渡 拓斗 星野 竜也

活 動 報 告

■ 2024 年度のまとめ

- ・医療安全向上のため医療機器研修会の開催や各種委員会に参加し、活動を継続している。
- ・新人看護師・初期研修医に医療機器・医療安全の研修会を継続している。
- ・毎日、医療機器安全ラウンドを行い医療安全に貢献している。
- ・医療機器の日常点検、定期点検を担い、安心安全な医療を提供出来る様に活動している。
- ・接遇と医療安全向上の為、朝礼時に勤務者全員で標語の唱和を継続している。
- ・超純水透析液基準を継続し、質の高い透析医療提供に貢献している。
- ・各科インターベーションの際に医師の負担軽減の為、助手を担っている。
- ・手術室業務を拡張し手術室スタッフの点検業務の負担軽減に貢献している。
- ・呼吸器装着患者の搬送時タイムアウトを作成し、安全を向上させた。

■ 2024 年度診療実績

	件数	前年度比
医療機器終了時点検及び定期点検件数	5209 件	107.1%
血液透析件数	12,322 件	109%
HCU 血液浄化件数	103 件	90.3%
HCU CRRT 件数	9 件	128.5%
腹水濃縮処理件数	28 件	121%
血液吸着式血液浄化件数	31 件	81.5%
心臓カテーテル検査及び治療総件数	153 件	98%
ペースメーカー外来件数	148 件	96.1%
遠隔モニタリング	714 件	125%

■ 2025 年度の課題

- ・新人看護師・初期研修医の医療機器、医療安全研修内容を定期的に見直し、最新の情報を提供できるようにする。
- ・中途採用者に医療機器研修を企画し統一した手技を整えていく。
- ・医療機器の日常点検・定期点検を行い、安心安全な医療提供が出来る様にする。
- ・医師の働き方改革に基づき臨床工学技士に求められる各種研修に参加し知識・技術の習得に努め、タスクシフトを計画する。
- ・医療機器の計画的な新規導入・更新を立案し長期運用計画を作成し運営に貢献する。
- ・実習生の受入に対応していく。

薬剤部

主 な 体 制

部 長 : 大竹美恵子
主 任 : 宮内 智行
薬剤師 : 17人 (常勤17人、非常勤1人)
助手2人



日本学会等認定資格

日本病院薬剤師会 妊婦・授乳婦薬物療法認定薬剤師	1	
日本緩和医療薬学会 緩和薬物療法認定薬剤師	1	
日本糖尿病療法指導士	1	
JSPEN 栄養サポートチーム専門療法士	1	
日本アンチ・ドーピング機構 スポーツファーマシスト	2	
薬学教育協議会 認定実務実習指導薬剤師	3	
日本病院薬剤師会 日病薬病院薬学認定薬剤師	1	
日本薬剤師研修センター 研修認定薬剤師	5	

活 動 報 告

■ 2024 年のまとめ

項目	件数	前年度比
薬剤管理指導料 1	4,260 件	123.4%
薬剤管理指導料 2	4,363 件	103.0%
病棟薬剤業務実施加算 1	11,284 件	105.0%
病棟薬剤業務実施加算 2	4,056 件	96.9%
退院時指導	127 件	96.2%
麻薬管理指導	258 件	105.7%
無菌調製件数 (抗がん剤)	1,211 件	103.6%
無菌調製件数	415 件	145.6%

2024 年は新卒薬剤師の入職は無かったが、常勤事務の調剤助手が配置された。薬剤師業務を見直しタスク・シェアがされ、薬剤師の負担を軽減することができた。

2 年目薬剤師の病棟業務研修は昨年の反省も踏まえながら指導を実施し、各々の基礎力を向上することができた。3 年目薬剤師は 1 病棟を 1 年間担当し、2 年目のローテーション研修では経験できなかった症例、医療従事者対応、患者対応など様々な経験をすることができた。

2024 年は病棟担当者を充実させることができた

ため、薬剤管理指導業務件数も前年度より大幅に増やし経営に貢献することができた。

また、法人内の介護老人保健施設への対応も開始し、入所者への投薬方法を見直した。

薬学生実務実習は 1 人受け入れた。

■ 2025 年の課題

2025 年の新卒薬剤師の入職も叶わなかったため、現職の離職防止のためスキルアップおよびモチベーション維持が課題となる。そのために「心理的安全性」を重要視していきたい。また、運用していた教育ラダーの見直しを終了し新教育ラダーが完成したので運用を開始し、認定薬剤師新規取得者を増やしていきたい。

患者に安全で安心な薬物療法を提供するため、「退院時薬剤情報管理指導料」を増やしていく事を 2025 年の職場目標とした。

医薬品の供給体制は改善する見込みがない状況だが、患者の命を守るため尽力していきたい。

病院事務局

主 な 体 制

事務長：井本 光洋
副事務長：小林 淳一
事務次長：高井 一茂、林 俊彦
他：1名



学会等認定資格

診療情報管理士	1	高井 一茂
第1種衛生管理者	1	小林 淳一

活 動 報 告

■ 2024年のまとめ

前年度末をもって新型コロナウイルス関連の補助金がすべて終了したことを受け、補助金に依存しない経営の確立を目指した。具体的な施策としては全職員が参画する経営改善活動を展開し、各部署において「増収」と「費用削減」の両面から経営目標を立案し、病院全体で進捗を共有しながら取り組みを進めた。

中間評価の時点では、増収面については順調に推移していたものの、物価高騰の影響により費用面が経営を圧迫していることが顕在化した。そこで下半期からは新たに「カイゼン」活動として「ムリ・ムダ・ムラ」の削減を重点的に推進した。その結果、予算の達成には至らなかったが、年度決算では黒字を確保することが出来た。

医療体制については、今年度も引き続き発熱外来を継続し、地域医療を支えるとともに、Web問診の導入により受診のしやすさを改善した。救急搬送については二次医療圏外からの受け入れにも積極的に対応した。

医師体制では、今年度より精神科医師の常勤配置および消化器内科医師の増員などがあり、精神科外来における新規患者の受入れ、超音波内視鏡 (EUS)

の稼働、心不全早期発見プロジェクトの推進を図った。また、地域医療機関との連携強化を目的として活動し、その中で新たな医療機関とも関係を構築することができた。

接遇面では、外部講師を招いた講習会を複数回開催し、多くの職員が受講して改善に取り組んだ。ハラスメント対策については、法人から発信された「脱ハラスメント宣言」に基づき、病院でもハラスメント対応マニュアルおよびフロチャートを見直し、運用方法の再確認を実施した。併せて、職員への啓発としてチラシ配布や院内掲示、Web研修などを通じて、理解促進の機会を設けた。また職員の離職防止およびメンタルヘルス対策として、公認心理士による「職員メンタルヘルス相談窓口」を開設し、職員が安心して働ける環境づくりに務めた。

来年2月に予定されている公益財団法人日本医療機能評価機構による第三者評価（更新受審）に向けて、日常業務を俯瞰する視点での再点検を進めた。

■ 2025 年の課題

1. 経営の安定化と持続的成長を目指し、「攻めの増収」、「攻めの費用削減」を軸に、数値目標を設定し、全職員で経営改善に取り組む。
2. 地域医療を支える中核病院として、質の高い医療を提供する為に、職員が安心して働ける環境を整備し、持続可能な医療体制を構築する。
3. 人材育成を通じて職員一人ひとりの専門性と人間力を高め、患者やその家族を尊重し、そして職員同士が互いに感謝し合える文化を醸成する。
4. 地域住民が安心してかけられる病院を目指し、求められる医療の提供と健康活動を通じて地域の活性化に貢献する。
5. 医療機能評価の更新受審を通じて、医療の質の向上と患者や地域社会からの信頼性向上に務める。

以上の 5 つを 2025 年度の病院方針として掲げた。方針達成のための具体的目標を定め取り組む 1 年とする。

医局事務課

主 な 体 制

課 長 : 丸山 和希
副主任 : 片山 裕美
職員数 : 14 人 (うち医師アシスト 10 人)



日本学会等認定資格

卒後臨床研修評価機構サーベイヤー

1

丸山 和希

活 動 報 告

■ 2024 年度のまとめ

・医師の確保

初期研修医 6 人、専攻医 3 人 (循環器内科: 1、総合診療科: 2)、スタッフ 5 人 (呼吸器内科: 1、消化器内科: 1、外科: 1、産婦人科: 1、精神科: 1) の常勤医増員となった。外部プログラムから延べ 2 名の専攻医受け入れ、また新たに帝京大学産婦人科から専攻医の派遣が開始され、総勢 72 人の医局体制となった。

・高校生、医学生への対応

高校生医師体験や医学部入試対策の模擬面接講座を開催し、医学部進学を目指す学生への支援を行った。医学生の見学・実習では 1 年生から 6 年生までで延べ 49 件の受け入れを行った。

8 月には、慶應義塾大学の医学部・看護学部・薬学部の学生が「地域をみる視点」や「多職種連携能力」を養うことを目的とした地域診断フィールドワークの受け入れを行った。

■ 2025 年度の課題

〈医師確保〉

リクルートサイトや SNS での情報発信により力を入れ、初期研修医や専攻医をはじめとした常勤医師確保につなげる。また学会やセミナー等の機会を

利用し、臨床研修・専門研修に携わる事務のスキルアップと制度の理解を深める。

〈医師アシスト係〉

常勤医師を対象としたドクターアシスタントに求める役割・業務内容についてのアンケート結果から、更なる医師の負担軽減や業務の効率化につなげていく。



利根保健生協
リクルートサイト



利根中央病院
初期・後期研修情報



総合診療科
facebook ページ



研修センター
facebook ページ



研修センター
X (旧 Twitter)



研修センター
Instagram

総務課

主 な 体 制

課 長 : 武井みゆき
主 任 : 高橋 陽介
職員数 : 16 名



学会等認定資格

医療情報技師	2	大野 秀彰・高橋 陽介
甲種防火管理者	1	武井みゆき
防災管理者	1	武井みゆき
診療情報管理士	1	吉田 達哉

活 動 報 告

■ 2024 年度のまとめ

総務課は医療材料管理、勤怠管理、設備管理、庶務業務、電話交換、リネン業務を行う総務係とシステム管理を行うシステム係で業務を行っている。

総務係は 13 名で業務を行った。医療材料管理に関しては昨年に引き続き資材の価格高騰が続いており、SPD 業者と連携して商品の切り替えなどで経費の圧縮に努力した。高額医療機器を購入する際は良い機器をより安く購入できるよう粘り強く価格交渉をしている。

勤怠管理では勤務予定実績の入力や入院基本料様式 9 表作成のため、担当者を半日看護部に配置し、看護師長の業務負担軽減に取り組んでいる。設備の維持管理は関連業者と連携して管理を行っており、大きな問題はなかった。今年度は委託業者と連携し、夜間想定消防訓練を実施することができた。

また、2024 年 6 月の診療報酬改定により「救急患者連携搬送料」を算定することが可能となったことから、職員 3 名が交代で転院搬送の任務にあたっている。

システム係は 3 名で業務にあたった。システムに関する大きな事故はなかった。ランサムウェアな

どの脅威に備えるため、「サイバーセキュリティー対策訓練」を職場責任者中心に 39 名の参加で実施した。

■ 2025 年度の課題

総務課内の業務効率化を目指すとともに、守備範囲の広い業務に応えるために、担当業務複数体制の構築を目指したい。また、昨年度に引き続き医療材料、光熱費など価格高騰に対して経費削減の取り組みを重点的に行う。

院内の突発的な業務依頼に対応できるよう、総務課全体の業務を把握できるような人材教育をすすめていきたい。

設備管理業務に関しては、新病院移転後 10 年が経過し、建物、設備など、関連業者と連携し維持管理に努めたい。

システム関連では情報ツールを使った運用の推進を図りつつ、引き続き職員への情報セキュリティーの周知を図っていきたい。

外来サービス課

主 な 体 制

課 長 : 綿貫 敦史
主 任 : 有坂 典子
副 主 任 : 高橋愛由美
職 員 数 : 19 人



活 動 報 告

■ 2024 年度のまとめ

- 2024 年 4 月は新入職員を 1 人迎えた。
- 毎年恒例の人事異動、入退職が多くあった。教育の場として、新たに配属された事務職員教育に努めた。配属 2 年目以降の若手事務職員も自立し、総合的な能力向上もあった。具体的には、タスクシェアリングを推進し、残業の偏りを防いだ。一つの業務に対する属人化を防ぐことによって、年休取得の推進を実施した。
- 2024 年度は職場内学習、課題解決などすりあわせ、各個人のレベルの維持・スキルアップを目標とした年だった。
- 外部講師を招いて、接遇講習を行いスキルアップに務めた。
- 利根保健生活協同組合の更なる発展、成長を常に念頭に置き、時代の変化とともに次年に繋がる取り組みを提案、実行した 1 年だった。

■ 2025 年度の課題

- 人員の定着が課題。2024 年度に引き続き、業務水準の維持、向上を目指す 1 年となる。
- 与えられた状況の中で、法人全体の効率化を意識しながら、業務の精度維持・向上が大きな課題となる。職員の出入が多く、職員が固定化されないため、質の維持を第一目標とする。保険請求に対し返戻・減点を減らし、また算定漏れのない正確な保険請求を追求する。引き続き職場内学習に意欲的に取り組み、診療報酬に対する知識を深め、他職種との連携をとり情報共有をしていきたい。
- 今年度も利根沼田地域で利根中央病院果たす役割を意識しながら、課題の克服に取り組みたい。

入院サービス課

主 な 体 制

課 長：西村 樹

副 主 任：糸賀 諒輔



学会等認定資格

診療情報管理士	7	西村 樹・森田 由美・牧野 昌広・細内 未来・稲垣 秀行・ 栗原 結奈・小菅茉那歩
---------	---	--

活 動 報 告

■ 2024 年度のまとめ

- ・新型コロナ関連の特例が終了した中で、診療単価を維持できるように加算算定に積極的に取り組んだ。
- ・95%稼働を目標にベッドコントロールへ取り組み、看護部と協力しわずかとどかなかったが、目標に近い数字を残すことができた。
- ・急性期一般入院料1の維持のため、看護必要度を意識した会計入力に取り組んだ。
- ・がん登録、NCD(外科・循環器)、JND(脳外科)は100%登録を継続することができた。
- ・新入職を1名迎え、職場全体で教育にとりくみ、ひとり立ちをさせることができた。
- ・再開された組合員活動へ積極的に参加し、地域とのつながりを深められた。

■ 2025 年度の課題

- ・年度予算の達成に向けて、正確な保険請求を行い経営に貢献する。
- ・95%稼働を目標にベッドコントロールに取り組む。
- ・看護必要度への理解を深め、基準維持のため取りこぼしをなくしていく。
- ・病棟配置事務職員の立場を生かして情報提供を行うと共に、チーム医療の中継点として機能できる存在を目指す。
- ・子育て中の職員も多く、育児や家庭と両立しながら働けるよう職場環境を整える。
- ・産休や定年退職が控えており、業務の引き継ぎを行っていく。

総合支援センター

主 な 体 制

室長兼診療技術部長	：	原田 孝（医師）
副看護部長兼看護師長	：	宮本 笑子（看護師）
事務課長	：	河邊 有紀（事務）
主 任	：	荻野 秀樹（社会福祉士・精神保健福祉士・公認心理師）
副 主 任	：	鈴木真紀子（看護師）
職 員 数	：	16人（うち看護師5人・准看護師1人・社会福祉士7人・事務員3人）

学会等認定資格

緩和ケア認定看護師	1	鈴木真紀子
公認心理師	1	荻野 秀樹
3 学会合同呼吸療法士	1	宮本 笑子
キャリアコンサルタント	1	小野 節子
衛生工学衛生管理者	1	小野 節子
第 1 種衛生管理者	1	小野 節子
介護福祉士	1	武井 律子
社会福祉士	7	荻野 秀樹・武井 律子・金井 智弥・萩原めぐみ・室田 翔斗・水越 結衣・小野 節子
精神保健福祉士	4	荻野 秀樹・武井 律子・金井 智弥・萩原めぐみ
介護支援専門員	4	荻野 秀樹・武井 律子・金井 智弥・小野 節子

活 動 報 告

■ 2024 年度のまとめ

・地域連携部門

コロナ過を経て今年度は利根沼田地域登録医、中之条方面の各医療機関を訪問、ご挨拶に伺い交流を深めることが出来たことで医療機関 11 件、医師 20 名に登録医として新規ご加入頂いた。沼田利根医師会症例検討会は当院を会場として 2 回（7/9、11/12）、院外医師も含めそれぞれ 37 名、42 名の参加、2 演題での開催であった。当院主催によるオープン CPC は 2 回（8/5、12/16）開催し、それぞれ 30 名、32 名の参加、クローズでの開催となった CPC（3/17）は 21 名の参加であった。第 11 回沼田利根医師会・利根中央病院情報交換会は滞りなく開催され、医師会医師（沼田市長含む）22 名、利根中央病院医師 42 名、管理部及び看護部 13 名、受付及び司会 9 名計 86 名の参加となった。医師への返書作成依頼を計画的に行い、年度末での返書率 100%を目指している。紹介率は前年度月平均 18.8%から 18.9%、逆紹介月平均は昨年度 22.7%から 23.4 へと着実に上昇している。問題点

はその都度スタッフ間で情報共有に努め、よりよい地域連携に繋げた。

・相談支援部門

職員の体制に変更なし。相談件数は 9506 件（前年度 9,295 件）とほぼ横ばいだったが、退院支援加算と介護連携指導料の算定数は前年度より増加した。

・入院センター部門

2～3 名配置。入院前からの患者支援を実施することで、円滑な入院医療の提供や病棟業務負担の軽減等に取り組んでいる。安心して療養生活が送れるよう、入院前から支援させていただくことを患者・家族に説明し、療養支援計画書を立案、受け入れ病棟職員、社会福祉士、退院調整看護師と情報共有をしている。また、薬剤の確認にあたっては、薬剤師と連携を図っている。入退前支援加算 106 件前年比（112%）算定件数と実数の差があるので対策を行う。入院説明の動画作成は次年度再検討とした。

・総合支援センター内の連携でベッドコントロールの情報を元に退院調整に協力した。

	2023 年度	2024 年度	前年度比
入退院支援加算（700 点）	1438 件	1735 件	120%
介護支援連携指導料（400 点）	61 件	71 件	116%
入院時支援加算 1（240 点）	80 件	88 件	110%

■ 2025 年度の課題

・地域連携部門

紹介された患者について紹介元の期待に応えられるよう対応し、しっかりとお返事を返すという基本を徹底していくこと、また地域の先生方の声を聴いて改善に努める姿勢を見せることで他医療機関からの信頼を深めることに繋がるという認識を踏まえて業務を進める。登録医、循環器センターご案内等の訪問・営業活動を定期的に行い、地域連携の強化に努める。沼田利根医師会・利根中央病院情報交換会を開催する。



地域連携室

・相談支援部門

加算の算定を漏れなく取れるよう仕組みを継続して見直していく。職能団体の研修への参加や資格取得など個々のスキルアップを図っていく。マニュアルの見直しや業務手順の見直しや調整を行い、業務の効率化を進め残業を軽減していく。

・入院センター部門

入院前からの支援、退院後を見すえた一貫した支援を行いつつ、院内の入院センターとしての役割を更新する。入院案内の電子化を行い、患者さんが繰り返し閲覧できるように工夫する。相談窓口として相談しやすい雰囲気作りを追求する。



相談支援チーム